女學雜誌

版權所有

各土曜日出版

第百六拾三號

當府内無郵税

一冊六錢

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 163. MAY 25TH, 1889.

SALUTATORY:—Mrs. Atomi; Mrs. Nakashima; Mrs. Shimoda.

EDITORIALS:—Sincerity.

LEADING ARTICLES:—The Queen Question. by Dr. K. Konakamura.

CRITICAL NOTES:—"Hatsu-Momiji."

MISCELLANEOUS:—"Difference in Attainments." "Different Causes for Vanity." "Pick up the Fragments." "A Letter to a School-mate." "A Letter to Mother." "Courage Born of Love." "Native Place."

DROLLERY.

CHILDREN'S COLUMN.

BIOGRAPHIES:—Olympia Morata.

NOVELS.

GENERAL NEWS.

第百六十三號目錄

祝詞　祝文（跡見花蹊）○祝詞（中島俊）○皇后陛下の御誕辰を祝するの歌十四首

社說　眞實、眞面目

論說　女帝論（文學博士小中村淸矩）

批評　漣山人の「初紅葉」（ふ、ち、）○烈士の血涙○蝴蝶の刃○手藝教育論○百花園

雜錄　踏なく〳〵○人長技を異にす○誇る所人各々同からず○屑を拾ふべし○昔し同窓の友たりし人に送れる文○母に送る○緣事最も大切なり○愛より生るゝ勇○古郷の天○玉堂隨筆○茶話三

兒籃　子供の旅路（友輔軒）

史傳　ワリンピア、モラタの傳（田村民治）

小說　あるのん物語（美妙齋）○酒鬼（藤庵主人）

寄書　皇后宮御降誕日を祝ひ奉る○歌二十二首

時事　皇后陛下御誕辰○其他六件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *The Musical Exhibition for the benefit of the "Dōshisha University" brought 103 yen 23 sen after all expenses were defrayed.*

(2) *A new building for the "Kankwain" (Reformatory) has been proposed on the cottage plan. We hope that its reforming influence may spread far and wide.*

(3) *A new association has just been began by the graduates of "The Normal School" (Woman's) for selfimprovement and benevolent enterprises.*

(4) *A musical exhibition has just been held for the benefit of the "Blind's and Mute's Asylum" at Kōtō Jogakko Tōkyo. There were over 400 people.*

(5) *A lady pays the largest duty in Tōkyo, Mrs. Nobu Kojima whose annual payment is 170 yen 83 sen.*

(6) *The Woman's Magazine publishes in this No. several literary pieces composed in honour of the birthday of the Empress togather with Dr. Konakamura's Essay on the Female Sovereigns of the Empire.*

Digitized by Google　　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

POETRY.

[illegible]

[illegible]

NOTES.

GENERAL NEWS.

WOMEN.

[illegible]

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

○祝文

跡見花蹊

夫れ王化の閨門に始まるは、古人の夙に稱道する所にして、古より今に至るまで、國家の治績、皆此理に基けるは、炳然火を賭るより瞭らかなり、試に夫の三百篇の風雅を觀るに、開卷の第一義、先づ后妃の美德、能く周家八百載の絕大偉業を闢くを說けり、唯夫れ淑德の窈窕たる、容儀の閑雅なる、關雎の如きあり、志行の純正なる、葛覃卷耳の如きあり、慈惠の人に及ぶ、樛木螽斯の如きあり、以て衆庶の慈母たるに足り、以て内治の重任に膺るに餘りあり、是を以て、其化下に及ぶ風の草に加ふが如く、挑夭兎罝、皆其餘澤の及ぶ所ろ、而して麟趾騶虞に至りては、和氣洋々四海に溢れ、遂に岐西百里の地をして、禹跡九州の版圖を統一せしめたり、嗟呼亦偉ならずや」○夫れ周家の后妃にして、其德の化する所、尙此の如き者あり、况んや我國に於ては、

兩聖相並んで、繼々承々、九五の大寶に陟り、民の之れを仰ぎ、之を慕ふ、猶日と月との如きこと、玆に三千年、

太神之を創め、神后之を大ひにし、推古皇極之を紹述し、元明元正之を顯章す、而して難に處し道を全ふせし、狹穗后の如きあり、業を興し施を好む、檀林后の如きあり、之を要するに民を視る子の如く、克く厥德を艱んし、以て今日に至るまで、至仁洽らず、一轍に出づるが如し、噫、我國民、誰か其恩澤に霑はざらん、孰か其光輝を衣被せざらん、德化涵濃、蓋し周家の比にあらず、而して今や、我敬聖慈仁ある、

皇后宮陛下、千秋の令節に遇へり、是妾等巾幗の徒、最も慶し最も賀し、欣喜措く能はざる所の者あり」○謹んで按するに、

陛下の昕夕惕厲、心を民事に注ぎ、往時の舊日本を脫し、今日の新天地を闢き、妾等衆庶をして、文明の餘澤に浴かしめ、雍熙の歡樂を享けしむ、試に之を事蹟に徵するに、彼の盛に庠序を設け、婦女子の無學無識の弊をして、高等の技藝を學ばしめ、以て今日の進步に至らしめしは、果して誰れの賜ものぞや、古來婦女子の陋風を洗滌し、其權利の在る所を知らしめ、竟に婦女子をして、今日の地位に立たしめしは、果して誰の賜ものぞや、親から養蠶の勞を執り、

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

貨殖の重んずべきを訓へ、遂に農商工業の盛んなる、今日の如きに至らしめしは、果して誰の賜ものぞや、大ひに慈善の業を興し、感化院慈恵院、及び赤十字社の如きものをして、所在碁峙せしめしは、果して誰の賜ものぞや、嗚呼是皆我か叡聖慈仁なる、
皇后陛下の至仁至徳の聖衷より出でざるはなきなり、妾等生れて
陛下の臣民となり、
陛下千秋の令節に逢ふ、焉んぞ鋭意之が祝意を表し、我天長節と共に永く我國人の一大祝日となさゞるを得んや」。妾無似を以て、叨りに教育の任に當り、手に彤管を執り、口に詩書を説くこと、茲に年あり、記す今を距ること十八年前、
陛下曾て妾を宮中に召し、謁を賜ふ、妾謹んで國風一章を獻じ、以て其榮を記す、蓋し異數なり、尋で内旨あり、紫袴を以て我校生徒の正服となさしむ、妾自來駑に鞭ち精を勵まし夙夜
陛下の聖意に戻らんことを懼れ、戰競自から恃み、未だ曾て解怠せず、常に自ら謂へらく、婦女子國家の治亂に關するや大なり、麟趾騶虞の果を得んと欲せば、先づ關雎葛覃の因なかるべからず、
陛下既に周家后妃の美德あり、故に能く此の太平をなせり、妾等の子女を教育する、務めて其意を奉じ、窈窕の淑德と、閑雅の容儀とを主とせざるべからず、二者實に婦女子の至大緊要たり、近來百般の技藝、之を歐米に採ると雖ども、此二者に至りては、或ひは彼に優るありて、劣るなき者あり、妾等教育の主眼たる、實に此二者を養成し、以て其他に及ぼすに在るなり、嗚呼我國の子女をして、悉く此針路を採らしめ、桃夭芣苢の和平を以て、兎罝漢廣の德化を得は、則ち我が
皇后陛下の聖意に酬ゆべくして、妾等平素期する所も、亦是に於てや畢ると謂ふべきのみ、今や此嘉辰に遇ひ、聊か所感を記し、往を推して來に及ぼすと爾り。

○祝詞　　中島俊

一年一年更に幾年妾が宮門を辭してより茲に年あり左れど妾が日々の諸新聞紙を讀の雙眼注で宮廷錄事に至らざるはなしこれに至ると共に思ひ宮廷を繞らざるはなきなり金港松

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

林の一草蘆に在る今日に至るも尙深夜隣家の鷄聲を聽ては新嘗祭夕紅燈影裏端坐の當直を思ひ出し雀鴉未だ鳴かず寒風戸を叩くの音を聞ては更衣窓外氷を碎くの聲に驚かさるゝ一月一日の早旦を夢み日和かに風靜かなるの春晝には素襟紅袴の同僚と採紅拾翠の遊を思ひ出し蟲咽び月明かなる夕は珠簾捲き盡し玉欄干外鏡の如き淸泉金波を壘むの風色を思ひ出す中にも尤も思ひ出し奉るは兩陛下御降誕遊ばせられし佳晨にぞわりぬ又此明治廿二年皇后宮陛下の御誕晨なる五月廿八日を迎ひ奉りて愈懷舊の感現在の悦將來の望交も相鍾る誰か天に親なしと云ふや天は近時に達りて殊に我が日本帝國人類に親しむを感ずるなり其上下相和し凝て一躰の如くなるを知ればなり天帝は殊に我日本國の女性を棄て玉はぬ事を確かめたり其我國都ての人類をして國母と仰敬せしめ玉ふ　皇后宮陛下の德高く明聰かに在らせ玉ふを以てなり都ての人類が國母とし仰ぎ奉るの皇后宮陛下なれば其陛下が高德聰明に渡らせ玉ふを以て偏に天帝が女性を棄玉はぬと言ふべくの理なしと雖も而も吾ゝは女性たるの故を以て他性に比して更に深く更に切に皇后宮陛下を慕ひ奉るなり昔しは九重の雲深く中々外面に御出御遊ばせ玉ふ事も稀れにして會まには花見の御遊び在らせらるゝも常に紅幄紫幃の別乾坤にして內侍の方々を除くの外は誰も見上げ奉るの榮を得ざりしなり曾て玉簾の內にのみ罩め玉ひし御衣の薫りは慈惠醫院或は多くの女學校迄に散布して其恩榮に感激せぬものはあらざるなり我朝の疇昔にありても女性にして帝位に登り玉ひし御方も又は皇后宮の御位にわらせられし御方の中にも賢明にして慈仁に富み玉ひし方の多くあらせられしは其遺せ玉ひし御歌又は其御美事をものする書籍等にも承知仕るのみにて其時代に遭遇するものと雖も御近侍の方々を除くの外は誰も今日の如く親く承知する事は出來ざりしならん今日の皇后宮陛下は吾々臣民に關する事物就中女學校等の事には御意を措かせ玉ふ由は吾々の常に承る處にして女性中一人として淚に咽びて御德を讃美し奉らぬものはあらざるなり我皇后宮陛下は泰西各國に其比を見ざる多くの忠臣を持玉ふなり此等が忠臣の肺肝は實に雪の如く潔らかなり綿の如く軟かなり花の如く芳し月の如く明か泉の如く盡きず山の如く動かず亦更に赤子の

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

如く可愛らしきあり此等の赤子は自然に作れる喜びの靨も堤を押して迸る悲しみの涙も都て皇后宮陛下に訴へ奉るを願ふなり雲か雲晴天にたな引雲再び九重相隔るの雲たらで一帯千里を縈繞するの雲となりて此赤子等が御慕ひ奉るの情を告げ參らするの使ひ人となし我全國赤子は此廿八日を祝し奉るなり妾も赤子の一人なり左れど卑人禮に慣れず祝意を表するの言を知らず唯一片の赤心を綴るのみ、舊作。

弓鞋跋渉幾山河。誰識鶯花關意多。一段東風春較暖。御園桃李近如何。

○皇后陛下の御誕辰に　下田歌子

おほふかけ廣き御園のはゝきゝの露にうるほふ四方の民艸

○皇后宮の御降誕日を祝ひ奉りて　萬里小路富子

若竹のみどりふかめて御園生にしけるを君がみかけと仰かむ

同　朽木舗子

夏のきてみどりいやますわか葉こそ君が御蔭と仰きてを見め

同　三條富子

なつくれは都もひなもおしなへてきみをや千代と祝ふ成べし

同　大谷恵子

大きみのめくみの露のあまねさにわきて榮ゆくなつ木立かな

同　跡見節子

わか竹の千尋のかけをあふきつゝ君をそいはふ夏はきにけり

同　片岡君子

大君のめくみもしるしわか竹のよことに千代の籠ると思へば

同　松野鐵千代子

夏くれはみ山の奥のわか葉までめくみの露にもれぬうれしさ

同　秋元澤子

水枝さす大内山のわかばにもきみが八千代のいろそ見えける

同　田邊朝子

限りなき君がめくみはなつの日の暑きよりなほあつくも有哉

同　後藤花子

夏されは木々のこすゑの若みどり君かみかけとまつ見ゆる哉

同　加納三穗子

少女がかふこのまゆの引く糸もながきをゆづる君か御代かな

同　阿久津愛子

春すきて夏にかゝれる藤なみの長きをみ代のためしとやみむ

同　矢島楫子

夏されはしける御庭のわか竹にかはらぬみ世の色は見えけり

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

●女學雜誌殘本大安賣

是迄本誌一號より百號に至る百冊を金壹圓に低減し賣却致し居候處追々欠號を生じ既に百冊の内四十餘冊の欠本と相成候に付き更に賣價を減じ**殘本五拾冊餘を金三拾錢**にて賣拂ひ可申候
○但し府外は通運先拂へにて御屆け可申上候

●通信女學講義錄　殘本安賣

通信女學講義錄は一冊大抵六七十枚づゝあり母親又は妻君が家に在りて女學の一と通りを學ぶの工夫あれば二三年の後は和學、理學地理、歷史、及び子育法、女子生理、家內理學、經濟學などの一斑を居ながら學び得べき方法なりしが此度女學雜誌と合併せしに付き從來女學雜誌のみを購讀せられたる方々は中途より講義を聞かるゝ譯にて御不滿足と存じ候に付き一冊二拾錢の處大勉强一冊拾錢郵送料二錢に其定價を減じ**即ち十五冊**自一至十五**代金壹圓五拾錢郵送料三拾錢**にて賣拂い申すべし

本村熊二、田口卯吉兩君序○關輪正路君纂著

女子必携 今世ひめ鑑　全一冊　賣價四拾五錢　郵稅拾四錢

凡そ當世婦女子の心得べき承知すべき質問すべき箇條は大抵記載し有之候蓋し昔の「ひめ鑑」の重寶なりしことを御存知の方々は此開化したる當世のひめ鑑も亦同樣に助けあることを想像し玉ふべし

佐々木豐洲女史譯

婦人言論の自由　全一冊　賣價八錢　郵稅四錢

右は婦人の言論に關することに付き切論せられたるものあれば姉妹方の必ず閱讀せらるべき價値あるものなり

文法口授　鈴木弘恭大人著　一冊賣價十六錢　郵稅四錢

右は明治女學校、成立學舍女子部、跡見女學校、頌榮女學校、長榮女塾等の敎科書なりし處**第一高等中學校**に於ても此度び**敎科書と認定**せられたり、他の各女學校及び男子の學校に於ても亦た此書を以て同樣に採用せられんことを請ふ

巖本善治編

女學叢書 木村鐙子小傳　賣價拾錢　郵稅六錢

右は鐙子刀自の傳記にて姉妹方の必ず閱讀せらるべき價値あるものなり

船越鼎太郎君著

產婦小兒 攝生法　一冊十八錢郵稅四錢

右は產婦小兒の養生法を平易なる文章にて何方にも分り易き樣認めたる者なれども所論は一々學理に照して實際を鑑み專ら當今の養生法其道を盡さゞることを敎へたり故に月經の心得より、姙娠したるか否やを知ること、出產の期日を知る法、姙娠中の養生法、產後の養生法.赤子のとりあつかひ、乳を飲まするの間養生法、母の乳を用ひずして子供を育つる法等ことごとく信切に敎へたり世の母たらん人は何卒一冊を座右に置きて最愛の生子を誤りて取扱ひ玉ふやうのことなからんを希ふ

統計局次長世良太一君序○統計協會議員吳文聰君序
通今居士橫山雅男君著

●婚姻論　賣價金二拾錢　郵稅拾四錢

此の書は通今居士橫山雅男君の著にして全編を二十八章に頒ち總論。婚姻の定義。婚姻は人類の天性。婚姻の効力等より說き起し早婚。晩婚。私婚。血族婚。離婚。一夫一婦の正婚など悉く歐米の統計上より論及し議論正確文章平滑一讀我國舊來鄙風の結婚を改良すべきの必要を感ずるの書なり

發兌　東京京橋區日吉町八番地　**女學雜誌社**

社告

女學雜誌代金滯候御方にして毎々御

催促申上候ども尚ほ御拂込無之仁あり而も其御住所すら分明ならざる向も候まゝ如此き御方よ限り以後雜誌上に於て御催促申上候に付不惡御承知被下度候但し本社は專ら情義を重んじ候心得に有之決して輕々しく右様の取計らひ不仕存候得共何分三四ヶ月以上も滯り居り候上每々の御催促に一報をも寄せられざる諸君に對してハ實以て不得止の處置と御許容あり度預め申上置候也

女學雜誌社會計係

基督教新聞 第三百三號

明治二十二年五月十五日發行

●社説　重ねて修正憲法草按を論ず○夏期學校の開設

●教報　內外重要記事

●論説　東京傳道其一（加藤覺）○合併委員に贈る書（ジヨン、デー、ギユリーキ

●雜錄　貧人の饗應○顏の光

●雜報及び廣告

六合雜誌第百一號目錄

明治廿二年五月十五日發行

◎神言外に基督の神たるを證す……ゼー、デー、デビス

◎信仰上の自治……伴　直之助

◎宗教革命論を讀む……小崎弘道

◎尊王愛國……坦庵居士

◎哲學研究法終極の區別……在米　中島力造

●雜記○不可識論、ハックスリー氏とウエース氏との議論○井上圓了氏の書翰○オルコット氏の演説○新刊書○廣告

東京々橋區加賀町拾一番地

警醒社

交詢案內

（催促する勿れ　郵券十錢送れ　委細に申來れ）

●雇ひたき方（甲）

十二　下婢　年齡廿歲より五十歲迄の基督信者を雇入度者あり

十五　召使　家內の手助けとなり小兒の世話なすべき年少女子を雇ひたし尤も讀書算筆を學びたき志あるものを望む

十六　召使　重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御內なり

十七　下婢　二十歲前後の薪水の勞を取る下婢を雇ひたし商家にて家族五人仕事はひまなり月給は一圓以上

十八　下婢　年齡廿四五歲にて裁縫讀書數學習字等を閑暇の節は教授致すに付き無給にて雇ひ入れたし但し基督信徒ならば教會に行くも家內同樣にすべし

●雇はれたき方（乙）

六　奉公　地方師範學校卒業生にて學資に困むに就ては可成西洋人宅にて兩人協力勉學旁雇へれたき二娘あり無給にて何地にてもよろし

七　裁縫　年齡廿三にして家內の手助けとならんが爲め內職に裁縫に雇へれ度き者あり華族樣か町家ならば大家のかたき內にて築地邊ならば通いても宜しとのと其他ハンケチーフのふち縫の如きにても宜し

十三　教師　栃木縣女子師範學校の卒業生にて何處かの學校或は他の御內にても教授に雇はれたきものあり可成くは麴町か駿河台邊を望む

一九　召使　裁縫の教授を專にし其他女子學校等監督兼留守居樣の者に雇れたし

二〇　裁縫　年齡十四五才にて華族樣か或官員方の御方之內ゝ小間使に雇はれたし最も餘暇に讀書授けくだされば給料は不申受

二四　奉公　年齡廿二オにして一と通り裁縫もいたし氣輕の生れつきにて華族樣か中以上の官員方へ中働きに奉公いたし度し給金は壹圓以上に願ひたし

二五　裁縫　裁縫は重もに婦人洋服にて和服にも巧なり學校若しくは華族其他高貴の御內に教師に雇はれたし

二八　奉公　普通小學科卒業の者にて（年齡二十二オ）產婆業を營まるゝ基督信徒の家に無給にて雇はれ余暇に產婆術を學び度ものあり

二九　奉公　年齡十四歲にて基督教信徒の家（可成は西洋人）に雇はれ度ものあり尤も普通食料小使仕着等一切持參致すに付き每日四五時間英語學の修業致したし

三〇　通辨　年齡廿四歲にて貴婦人方の英語の通辨さして雇はれ度ものあり

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌　第百六十三號　明治二十二年五月廿五日發兌

社説

○眞實、眞面目

鹿鳴館に於ては舞踏殆んど絶えたり、然るに今や日本人民の過半は皆な踊り出さんとはするあり、兼ねて浮かれ易き國風なりとは云へ、さて〳〵歎かわし、志士今までに於て早く警戒せずんば、狂踏亂舞、彼等は飛び跳ねつゝ遂に奈落の底に落入らんとす。

トマス、カーライル嘗てクロムエルを評して云く、古今歴史上の俊傑を以て欺き手多しとするものあり、然れども大凡そ一の大ひある良心なくして能く一つの大ひなる俊傑を作り能ふ乎、人は云ふ彼は虚僞昏弱なりしと、然れども余は其言行を學ぶ彌よ久しうして彌よ其の然らざるとを知れりと。蓋し大偉業を成し遂げんと欲するものは先づ最大の自信を要す、然るに彼の自から欺むくの人は亦た自から信ずる能わず、自から信ずる能わざるの人は亦た自からの事業を信ずる能ず、斯の如く先づ一身を欺き、次に他人を欺き、終に高天大道を欺むきて而して能く何事をか爲し得んや。彼の一時の機に投じて山師風の成功を爲す者、天下の收利に先んじて巧みに其益を盜奪するもの、汎々として輿論に伴隨し其の左右前後するまゝに左右前後して之が分捕物を拾ふの輩は論ぜず、苟くも預言者、改革者、矯風者の資格を以て國家に卒先盡力せんと欲するの大俊傑は、何よりも先づ自から信ずるの極めて強確なるとを要す。而して自信の強確なるは自から欺かざるにあり、仰いでは天に恥ぢず、俯しては公衆に恥ぢず、自から顧みて綽々餘裕あるにあらずんば自信決して強確なるとを得ず。故に自信する所ろ強確にして初めて正きとを得、正うして初て強きとを得、強ようして初て忍ぶとを得、忍びて初て落膽せざるとを得、斯くして千挫の間に萬艱を耐え、患難より彌よ忍耐を生じ、忍耐より彌よ練達を生じ、練達より彌よ希望を生じ、希望より彌よ確認を生じて、遂に大偉業を成就するなり。之を以て、吾人如此き俊傑の言行を窺ふに、其の言ふ所ろや極めて眞實なり、其行ふ所ろや極めて眞面目なり、敢て苟くも欺くとなし、敢て苟くも浮き立つとなし。

嘗て家豕を見たり、狹欄の内に三々五々として鈍鳴す、其聲尤も卑屈なり、切りに苦吟して漸やく主人の廢れたる食物を得たり、未だ足らずとするか踞々として鼻を以て地を堀る、

若し木根破茱を發見せば嘵々焉として歡こぶ、何んぞ其の無氣力なるや。然れども之れ野猪の末なり、彼等が先きに山野に在るや、一と度び怒るときは樹木震動す、牙を立てゝ撃てば狐狸未だ觸れざるに倒る、其一と度び進むときは敢て退ぞくことを知らず、皮毛針立大號して來るときは名手も尙ほ之を射殺するを能わず、何んぞ其の勇猛快强なるや。只悲しむらくは野猪の化して家豕となるのみにあらず、人も亦た一變して勇悍猛烈の質を失なわんとす。見よ昔し戰國の時世に天下を震懼せしめたる三河武士は、花の都に入りてより華奢風流の旗下士らひとはなれり、又彼の北方强暴の森林武士は、文質鼓を打つて下るとき天下悉とく威服するの勇ありしに、麗甘の羅馬に入りてよりは筋骨俄然としてトロケたり。大凡そ都門の空氣の極めて物を腐敗し易きことを知らば、都門の空氣の流走する所ろは亦た其所ろを腐敗する極めて甚はだしきことを知るべし。今や我國中の權力は悉く中央に集まり、總べての制度、威權、流行、は皆な東京市中より發す、何如なる英才も此處に來らざれば全國を制御するに足らず、何如なる新空氣も此處より流れ出ずんば、全國に行渡ることを得ず、於此乎全國を風靡する總べての感化は悉く都門の臭氣を混和せざるなし。嗚呼、彼の欺むかざるの勇氣、僞わらざるの氣節にして都門に滿つれば可なり、苟くも若し細巧なる、お上手なる、浮薄なる、輕卒なる都人情にして此處に充滿するあらば、之が四方に流れて八十餘州を感化する所ろ預じめ知るべし。吾人は未だ改革者の都より起りしことを聞かず、亦大ひなる人物の都に誕生したることを聞かず、然らば則はち都門の空氣は俊傑を養うの空氣にあらず、而して尙ほ此の空氣は外より新鮮にせらるゝことなくして斷えず外に向つて四散するの勢力ありとせば、吾國四方の淸潔を求むるは實に望みなしと云ふべし。密室内の炭酸氣は責めては窓より入り來るの新空氣を以て新たにせらるべし、然れども今の日本國は田舍地方の勢威を以て都門の臭氣を改むるの風力あらざるものなり。眞實、眞面目の感化は果して何處よりして發せん。

去年來壯士と稱せらるゝ一種の男子輩出沒す、聞くならく白帶三尺腰端に掛り、衣は骭に袖は腕に、ステッキを率ひて放歌高吟すと、察するに古しへの書生の風ありと云ふべし、吾人は新聞紙に由りて其の政府に歎願したることあるを傳聞し、又新聞紙に由りて其の大坂沼津新潟の邊に亂暴したることあるを傳聞せり、吾人は其の報道の實否を知らずたゞ新聞紙によ

二

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

りて此如くありしとのみ承知するあり。然るに其の一流の人々此度び當府下に登り來り、自から大坂浪人と稱して去日淺草鴎遊館に政談演說會を開かれたり、吾人は不幸にして此に傍聽するの資格を有せず、空しく亦た新聞紙に由りて當日の景況を聞くに、宮地茂平氏は　泣て有情の人に告ぐ：茂平は十年一日なり：改進黨シッカリ遣るべしの題にて、菅野道親氏は壯士不慣奈若生何：大阪壯士の濡衣…憐れむべし近眼特に憐れむべし東京市民の近眼の題にて、安田好則氏は安物買て鼻落すな：嗚呼血迷ふたか改進黨の題にて、中島直義氏は盡せ壯士の本分…國を思の情は愛婦を慕ふの情より切あり、の題にて演說せられたりと云へり。吾人未だ親から其演說を聞かず、亦た親しく諸氏に交際したるとなしと云へども、此等の演題と從來に於ける諸氏が言行とに由りて略ぼ諸氏が鬱勃慷慨する所ろの那邊にあるやを推知するを得べし。大凡そ玉石の合存するは啻に昆岡にのみ限らず、故に所以る壯士と幷稱せらるゝ人々の中にも固より其の玉たるものと石たるものとの存するあるは當然ありと云へども、吾人は彼の一見一聞直ちに之を悉とく石なりと評下し去るの無禮に憤どうらずんばあらず。　今の論者輕々彼等を評して書生あり過激なり亂暴なりと云へり、然れども過激亂暴の四字は直ちに以て大不德なるとを證するの句にあらず、况んや之を書生なりと云ふによりて抑そも何程の論價あるや。昔し高山彥九郎賴山陽等が勤王論の率先を爲すとき、亦坂本龍馬西鄕隆盛等が王政復古の率先論を爲すとき、彼等は皆な當世の君士人に書生なりとせられ、過激ありとせられ、亂暴ありとせられたり、而して此の過激たり亂暴たるの書生は果して彼の君士人よりも優れたるの人物にてありき。吾人は未だ所以る壯士なるものに交際せず、而して亦た其の新聞紙上に傳へたる如き處置に全く贊成する能はずと云へども、然れども密かに今の景勢を思ふて如此き一流の志士の出沒するに至りたるに泣かざる可らず。抑そも過激亂暴は穩當なる處置にあらず、吾人は死に至るまで自から過激亂暴なりと覺悟するの處置を爲さずと決心せり、然れども人誰れか自ら好みて過激亂暴を爲さんや、彼の鬱勃悲憤の發する所ろ思はずして遂に此の弊に陷いるとなきを保せず、之れ實に人情の弱點にして不完の人間に免れがたき所なり。吾人は信ず、正大の目的は正大の手段に由りて成るべしと、故に吾人は不幸にして今の壯士（勿論正直なる壯士）の處置に贊成する能わざる所ろありと云へども、私

かに其の變勃する所ろを察し、翻つて今の日本國の景勢を思ひ、吾等の國家に今ま如此き一流の士を存せしむるの需要あるとを歎ぜずんばあらず。見よ雲氣の沈滯するときは天に雷鳴あり、社會に一種の過激なる一種の亂暴なるもの出沒するときは、先づ此の亂暴過激なるもの丶出沒を憂ふるに先だち、深く現社會の道德何如なるかを考ふべき也。貴族的の虚飾盛なるときは大平民は憤どうらざる可らず、巧言令色の行わる丶ときは質朴者は罵しらざる可らず、昏醉愚眠するもの丶多きときは警醒者は叫ばざる可らず、憤聲、罵聲、叫聲の聞ゆるとき何んぞ其の聲に驚ろくべけん、先づ其の聲の發するは何如なる由縁に由れるやを研究すべし。之を以て吾人は今の壯士横行を聞て三つの疑を懷だく、曰く之れ何人かの煽動する所ろにあらざるなきか、曰く之れ濫りに壯語を吐ひて治安を嫌ふの言行にあらざるなきか、曰く之れ世上の虚飾不德に憤どうる野に叫ぶの大聲にあらざるなきかと。故に其の孰れなるに關せず、要するに吾人は之を以て今の社會の眞實、眞面目ならざるの由縁に發するものとして慷歎す。

然れども人情の至正に發せざるの慷慨憤怒は、不眞實不眞面目の甚しきもの也、吾人今まの國粹保存論を見るときは不幸にして此の感なきを得ず。抑そも國性國粹を保護するは何人と云へども極賛する所ろならん、故に吾人の如きも若し或る意味に於て言はゞ今の國粹保存論中第一の加擔者なりと覺悟すると久し、之を以てか今の國粹保存論者の尤も進歩したるものに贊成すると亦た頗ぶる厚つし。然りと云へども、彼の昔し攘夷と云へりし名目を今日に於て改稱し、甚きに守舊頑固と云へりし名目を今日に於て改名し、亦た尤も因循したる今の保守論を巧みに今日に於て改姓し、改めて之を國粹保存論として揚々大呼するに至つては驚歎に堪へず。彼等が日本國を愛すると云ふは尚ほ可なり、彼等が西洋人を斥ぞくるに至つては憫れむに堪へず。彼等は外國を擯斥し、西洋人を罵しり、此の進化もせざる日本國を以て無二の神洲なりと心得、徒らに壯語して夫にて愛國者なりと思へり。彼等若し本氣にて左樣に言ふならば願くは十九世紀の學術を一顧せよ、彼等若し徒づらに慷慨を氣取りて左樣に言ふならば吾人は鼓を鳴らして之を責めざる可らず。抑そも日本人と西洋人と何の異なりあり、日本國と外國と何の相違ありや、大丈夫苟くも眞正に國を愛せんとせば須らく虚飾なく國を愛すべし、濫りに器械的の理想を製造し、此の曲ぐ可らざるの頭まを漠然

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

たる名目の下に屈し、若し大正の愛と眞明の理とを以て照らさば直ちに破裂すべきの僞信仰に委賴する如きは、抑そも此の文明時代に於て國を愛するもの丶本色ならんや。日本を愛する爲めには西洋人を敵視せざる可らざる乎、左らば問はん汝ちのホーム(室家)を愛する爲には隣人を敵視せざる可らざる乎と、若し隣人の非を擧げ、隣人の賢智を斥ぞけ、而して後ち初めて一家の和睦親密を維持し得べしとせば、如此きホームは人間至樂の天然境にあらざる也。凡そ尤も關係の厚き所ろに尤も愛情の切なるは人の天性なり、彼の生れてより親と呼ばれ子と呼ばれ終始一家に同居して朝々暮々共に飲食するときは、假令ひ吾が親に何如んの過ちありとも子之を他に鳴らさず、假令ひ吾が子に幾千の罪ありとも親之を棄てず、七たび諌さめ、七十七度諌さめ、明らかに其失を見て明らかに之を戒しめ、明らかに隣人の美を見て、明らかに一家之に倣ふは豈に眞正のホームにあらずや。之を一國に付て云ふも亦然り、美ある富士山は吾等が四千萬人と共に幼けなきときより歌に詩に共に吟ぜしの所ろ、美くしき琵琶湖は吾等が四千萬人と共に幼けあき時より耳に音に聞きし所ろならずや、太洋中に浮べる此の一小島内の同じき乘合人、二千六百年間の此の一大家族の同じき子孫たるに、吾等如何にして此の日本を棄つることを得んや。好し吾がホームに不平ありとも數日旅行し見るべし客舎の暗燈は乍まち吾に涙を落さしめて乍まち吾がスウィートホームを思ひ出さしむべし、如此く如何に我日本國に不平ありしも、試みに高山に登つて之を臨視せば、試みに數里外に乘出して之を顧みれは、試みに洋を渡つて一髮日本海に引殘るの郷土を望まば、試みに足を外邦に着けて我日本四千萬の同胞を思ふときは、何如にしてか此の日本國を忘るゝことを得んや、吾等が日本を愛するは日本の美國たるが故にあらず實に吾等が古郷たれば也。彼の在りもせぬ美粹を我日本に製造せしめ、此の金箔を塗り來りて初めて神洲の愛國心を起し得べしとするは、輕溥も亦た極まれりと云ふべし。左れば吾人は吾が室家を愛しつゝ亦た隣人を極愛し、吾が日本國を愛しつゝ彼の西洋諸國を愛す、而して此の愛は啻に汎々として愛するにあらず、實に西洋文明國の文明を愛するなり、切言するに其の文明の現況を愛するにあらず其の文明の理想とする所ろを愛する也。誰れか我日本國の偶像敎を有難しと云ふ、誰か我日本國の美術を美なりと云ふ、誰か我日本國の道德の基本（道德の實行と云はず吾人は其の基本と

云ふ)を確固なりと云ふ、吾人は實に之れを嫌惡して止まず、只だ戀々として外國の文明に心醉するもの也。故に一日も早く之を我四千萬の同胞に學ばしめんとすると、恰かも是れ信切なる慈母が他家の子の出世を見て氣を揉むが如し、窮極する所ろは我家の子をして立身せしめんとするに在る也。嗚呼エドモンドボルクの議院に立て米國獨立論を陳ぶるとき、ラフエーテが同志を引て數萬里の海洋を越ゆるとき、彼等が志望の何如に高尚純潔なりしよ、此時に於て誰か彼等を以て愛國者ならずとせん。吾人は世界主義なり、故に一國を愛す、一國を愛す故に我ホームを愛す、總べて是れ吾人が人情正當の發達に從がふ、絕へて自然を曲げざる也。乾を轉ずるものは坤に至り、坤を轉ずるものは乾に反へる、彼れ徒らに歐洲を慕ふが故に俄然として亦た歐洲を惡む、安んぞ知らん今の徒らに歐洲を惡むは亦た異日の歐洲崇拜にあらざるなきを。お面にあらずんばお足、栅にあらずんば寢臺、ポール(極)よりポールに奔走往來して轉々疲勞す、愚と云はずして何ぞ。今の保守的國粹保存論の如きは多くは眞實眞面目よりの發論にあらず。

此他今の文學を見よ、其の根なき壯語、其の浮薄なるシヤレ、其の氣骨なきの摸倣、其の淫陋なる小說、其のマジメなき議論、何んぞ夫れ如此く甚しきや。又今の教育界を見よ、特に教育界中最高の點を見て全躰を推せよ、大學獨立を極要とするものは之を國會議場に於て主張するの熱心と信仰なく、此の信仰と熱心となくして極めて危ぶむの不用物を袞龍の御袖の下に置かんとす、而して之を論ずるもの奇しまず聞くものも責めず、何んぞ教育界の不熱心不忠實なるや、其他累りに選擧にさはぐもの、此際冷々として隱遁するもの、虛報を傳ゆるもの、風評を造るもの、不眞實は不眞實に相接し、不眞面目は不眞面目と相ひ隣りす、嗚呼何んぞ甚しき。

夫れ英雄の本色は質朴なり、大國の現象は沈實なり、大凡そ眞實眞面目とは彼の飾らざる僞はらざるの自然を云ふ也、今の我國萬象の多くはナチウラル(自然)ならざるを見る、國中に沈實質朴の風なきは實に止を得ざると也。

見よ、都門の空氣は何の故に腐れ易きか、曰く其の交際、其巧利の虛飾欺僞を必要とするあるが故なり、地方の空氣は何の故に淸きか、曰く森林は亭々として自然に伸び、戸口相ひ離れて交際するの極めて眞率なるが故なり。然らば即はち一個人の爲めの都門は其のホームの外なり、其の爲めの田舍は

ホームの内なり、若し夫れ日本戸々の室家にして極めて清潔あらば茲に眞實眞面目の氣象を養生すること至りて易し、苟しくも族人相ひ僞はることなく、共に得々として團欒和樂し、世は如何に腐れたるに係らず、其惡空氣は此の室内に入り來らず、室内の香氣馥郁として自づから別世界を造ると、恰かも都を去る半里にして既に綠々蒼々たるが如きあらば、此の如き室家の能く人を強くし眞にすること非常なりと云ふべし。故に今に於て日本人民の浮れ易き僞わり易きの浮薄を矯正するは、之を清潔美正なるホームの感化に委するの外なく、而して清潔美正なるホームを作るの任は一に一家女王の任に歸すべし。今の日本女流の責めや極めて大、而して今の日本女流を教育するものゝ任や更らに尤も大。

論　説

○女帝論

文學博士　小中村清矩

從本君　皇后宮陛下の御誕辰にあたり先進なる名家閨秀の文稿を雜誌に掲らるによりおのれにもと乞はるゝになまなまの述作よりはと先つころ學士會院にて講演せしひとくだりを書しるしてなくりぬ。

歴朝女帝

神功皇后	仲哀天皇皇后
飯豐天皇	顯宗天皇仁賢天皇皇姉
推古天皇	敏達天皇皇后 聖德太子皇叔母
皇極天皇	舒明天皇皇后 天智天皇皇母
持統天皇	天武天皇皇后 文武天皇皇祖母
元明天皇	草壁皇子妃 文武天皇皇母
元正天皇	草壁皇子女 文武天皇皇姉
孝謙天皇	聖武天皇皇女
明正天皇	後水尾天皇皇女 後光明天皇皇姉
後櫻町天皇	櫻町天皇皇女 後桃園天皇皇叔母

女帝と申しますものは、我國に古くから御座いますが、また歐羅巴各國にも有ります、然るところ、我國の女帝と、歐羅巴の女帝とは、大いに立て方の趣きが違って居ります、其の違ひました事を辯じますには、先ず我國の歴代の、女帝の御事蹟を申しませんと、相違が分りませんから、先づ茲に掲げました順序によって、御事蹟を申し、並びに違ひました主意を述べませふ。

さて歐羅巴の女帝には、夫が有る樣子で有ります、是れも國によって、違ふさうで有りますが、先つ英吉利などでは、血統を重んずる爲め、假令ひ先帝の御兄弟が有らうとも、女帝を立て、夫を迎へ、其女系傳統の皇子は、其父の姓に從て、王統の名稱を變ずる事のあるのが、英國の風ださうで有ります、其の外各國にて、風がいろいろ變る事は、專門で有りませんから、委しくは知りません、然るに我國の女帝と申すは、夫か無く、多くは先帝の御后でありました、且つ英吉利などと違って、先帝が崩御があると、其の天皇に御子が無ければ、其御兄弟とか、甥とかが、帝位に即きます、全く御血統が無いと、二三代たっても、皇族の中から迎へるが、我國の風で有ります。

うれなれば、我國の女帝は、どふいふいはれで、立ったかと思ひまして、段々と古典を考へますと、これには三つの差別があります、第一には、女帝を立てる其の時分に、何か仔細が有りまして、女主を立ったことが有ります、全く時世の景況で有ります、第二は、父帝の思召を以て、御立てなされたのがある、此れ等のことは、御歴代に就て、御話しをする時に申しませう、それから第三は、先帝の

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

崩御が有ッて、皇太子が御幼年で有ッて、其御成人までの間、御母后などが代ッて、繋ぎに政を執られたといふがあッて、簡様に三段の次第となります。

第一第二の事は、御歴代に就て申す時に、御話しませう、先づ第三の、皇太子の、御若年の間の、繋ぎといふことが、殊に多いから、其の事をさきへ御話し申して置きませう。

我國には、昔し御幼年で、帝位に御即きの事は無く、少なくも三十ぐらゐ、多いのは四十ぐらゐで無ければ、皇太子が帝位に即く事は、なかッたと存じます、それは大切な御親政もあり、また戰が有れば、御親征が有るといふのだから、御幼年ではいけない、それゆゑ相應の御歳までは、御母か、御祖母か、または女の御兄弟が、女帝になられたので有ります、然るところ、藤原氏が權を專らにする樣になッて、文德天皇の皇子清和天皇は、御年九歳で御即位が有りました、是れが御幼年の天皇の始めで、其時、御外戚藤原良房が、攝政となられましたが、臣下で攝政となッた始めで有りまして、それから攝政といふ名が、自然と官名の樣になッて、いつでも攝政は、藤原氏と定ッて、十歳以下で、帝位に御即きなさッた方々が、往々ありました、かやうな譯で有りますから、其以前には、皇太子が御幼年で、帝位に御即きなされた事は無いから、御成人の間、母后が御即きになりましたので有ります。

これからさきへに掲げた順序によッて、歴代の女帝の御事蹟を申しませう。

第一神功皇后。　此のみかどは、開化天皇の五代の裔で、御名は息長足姫と申し奉り、仲哀天皇の御后で、天皇崩御の後、三韓征伐が有り、其の御征伐中に、御懷姙で有ッて、應神天皇四歳の時に、皇太子に御定めになり、六十九年の間、政を執ッて崩御されました、このかたは御卽位の事が無いから、日本紀には、天皇とは無く、總て皇太后と書いて有ります、併しながら御歴代の中には、加へてあります。

それから後の、編年ものの書には、皆御歴代の中に這入ッて居ります、然るに德川幕府の時、水戸で大日本史が出來まして、其時に義公の英斷を以て、「これは御卽位も無く、古事記にも、天皇と云ッて無いから」、といふので、本紀から除いて、后妃傳といふ、キサキの傳の方に入れました、これは道理上から推して參る、一ト通りの論で有りますが、併しながら全くの攝政で御いでなさる譯で有ッたなら、皇太子が昔しのことであるから、四十か五十になッたら、帝位に御即きになりさうなもので有ッたが、神功皇后は、攝政六十九年、御年百歳で崩御になッて、後、應仁天皇は、始めて御即位になッたのが、七十の時で有りました、若し全くの攝政なら、日本紀に、神功皇后紀を立てずに、應神天皇紀を、仲哀天皇紀に續けて、神功皇后のは、應神天皇紀の中に、入れて宜さゝうなもので有るのに、區域を立てて有ります、こゝに於て、和漢の學者が、論の有ッた事で有りますが、其れに就いて、私が愚考して見ますと、神功皇后は、御即位の禮を行はれませんが、六十九年の間、實際天子に御なりになッたので、日本紀に、攝政と記しては有りますが、「都二于磐余一」、「崩二于若櫻宮一」、「葬二狹城盾並陵一」、とすべて天皇の御ふりあひに書てあります、崩すとは、天子に限る事で、また狹城盾並陵と有りますが、后の御墓も、陵と云ッた事も有りますが、此御陵は、歷朝天皇の例格で有ッて、天皇の陵に、御使がたつことが有ると、いつでも神功皇后の陵にも、奉幣が有ります、これは三韓征伐の大功の故でも有りませうが、一つは天皇の證據で有りませう。

元明天皇の時に、諸國に命令があッて、風土記と云ふ地誌が出來ましたが、これは其地の老人に、古いはなしを聞いて、書いたもので有りまして、今では僅かばかり殘ッて居りますが、其殘ッてゐる常陸風土記、攝津風土記などに、「息長足比賣天皇」と書いて有ます、それから遙か後のものだが、支那の宋史の日本傳には、「神功天皇」と書いて有ります、これは日本人の書いたのを、持ッて行ッたので有りませうか、或は古くから神功天皇と稱した、例證となりませう。

今一つ證據を擧げますと、我國の上古は、天皇は御生涯の天皇で、御崩御が無ければ、皇太子が位に即くことは無い、(然るに聖武天皇以來、例格が破れました、其の事はあとで申しませう)、さすれば應神天皇は、皇太子におはしまし、神功皇后が崩御で無ければ、御即位が無い譯であります、後世ひと通りの考へでは、皇太子がソンナに老年になるまで、皇太子をして居られる事は有るまいと思ふが、其れは右の事狀の故で有りませう、尙ほ考へて見ると、史記や、漢書の中に、漢の時に、天子が幼年であると、母后が簾を垂れて政を聽くと云ふことが有ります、其の時など皇太后攝政と記して有ります、恐らくは其の例に倣って書いたもので有りませう、と申すものは、皇太后といふは、孝德天皇以後の御稱號で、日本紀は、支那の制度を御用ひになッてから、書いたものだによッて、支那に見せても、恥かしくないやうに、したもので有りませうから、名稱に於きましては、後世の

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

事を始めに及ぼして、書た事が多く御座りますから、四道將軍、妃、夫人などの如く、其實は有ても、かゝる漢名の無かッた事は、諸君の御存じの事で有りませう。

其の通りに、日本紀に、皇后と記し、攝政と記しては有りますが、久しく天皇の事を行ひたまひしにより、御歴代の中に加へました、それゆゑに水鏡などの古書には、これを女帝の始めと記して有ります、また民間に言ひ傳へました、古事を記したる、風土記などにも、それから天皇と記したもので有らうと、私は思ひます。

併しながら御婦人で居ッて、帝王の事を行ふといふことは、全く伊勢の大廟に祀られた、天照太神の跡を、遠く御慕ひになッた事でありませう、或は天照太神は、女神では無く、男神だといふ說が、二百年以來ありますが、此れは假令ひ太古の事でも、人主を女神では、不都合であらうといふことから、起ッた臆測の說でありませう、女神の證ば、御名が大日孁貴と云ひましたが、「メ」とは女の事であります、また古事記、日本紀に、素盞嗚命が、天上に御上りの時、女の髮を解いて、男の髮に結ばれたといふ事でありましたが、全くの男神なら、其の様な事は無い筈であります、また伊勢の太神宮に、夏冬の御裝束を奉るといふ儀式が今もあるが、此れは女の御裝束で有ります、これで女神たることは、判然として居ります、世には陰陽の理屈に泥み、支那にも、則天皇后の如き婦人の外は、かやうな女はない、まして我國の上古の女が、左様いふ事は有るまいと思ふ人も有りませうが、左様で無い、我國の昔しを見ると、神武帝以來、各所の酋長となり、多くの人を從へて居ッた者に女が有ッた、それは神武帝が、御東征の時に、「名草戸畔、丹敷戸畔」といふものが有りました、「トベ」とは、「トメ」と云ふと同じ事で、古へ婦人の稱であります、また景行天皇が、筑紫を御征伐の時にも、神夏磯媛、速津媛などいふ女の酋長が、降參した事が有ります、其の外探索したら、いくらも有りませうが、まづ其二つ三つが、此の様な譯で、婦人にもヨホド權力が有りました、其れ故に御婦人で、帝王の事を行ッても、少しも怪しむに足らぬことであります。

さて御話しが横みちへ這入りますが、此度の講演は長く無いから、序でに天皇の御稱號の御話しをいたしませう、天皇の御稱號は、日本紀の卷の三に、神日本磐余彦天皇とあつて、其下の小書に、神武天皇とありますが、これ以て後の定めを、始めに及ぼして書たもので、まづ神武、綏靖といふ、漢ざまの御諡號は、遙か後世の文武天皇の時（一說には桓武天皇の時）に、神武以下御歴代のを、一度に考へて、つけ奉ッたといふことで有ります、尤も其以前、我が國風の諡を奉ッた事もあり、（持統天皇に、高天原廣野姫天皇と謚したる類）そこで天皇といふ號は、日本紀を見ると、神功皇后が、三韓御征伐の時、新羅國に御攻め入りの時に、新羅王が驚いて、前後不覺の體となつて、漸く氣が付いて、「吾聞、東有二神國一、謂二日本一、亦有二聖王一、謂二天皇一」と言つたと云ふ事があります、してみると日本といふ名も、天皇といふ稱も、其頃もうあッたやうで有りますから、或は此二つの稱號は、支那や三韓の人から、つけたのであるといふ人もありますが、私の考では、此神功紀の文も、ヤハリ日本や、天皇といふ號の定ッた後世から、古へに及ぼして書たものとみる方が、穩であらうと思ひます、さて國史に、天皇といふ御稱號の判然と定ッて記してあるのは、推古天皇の時で、隋國へ遣はされた御返翰に、「東天皇敬白二西皇帝一」とありましたのが始で有ります、太子傳には、聖德太子が、親から筆を執られたといふ事でありますから、或は太子の時、御協議があッて、定ッた事でありませう、また日本といふ名も、此の頃定ッたものであらうと思ひますが、此話しをして證據を引くと、長くなりますから、只今は申しますまい、天皇といふ御稱の始らない以前は、我が國の君主の事、スメミマノミコトと云ひ、また スメラミコト、スメラギなどと申しました、此れは往古からの御稱號であります、唐風の制度を御用ひになッてからは、大寶の公式令に、書式も定まりまして、外國に向ッては、明神御宇日本天皇と書き、また我國の人民に對しては、明神御大八洲天皇と書く事になりました。

但しまた皇帝とも御稱へなされた事があります、併しながら正しくは天皇で、皇帝と云ふのは、御別號のやうなもので有りますから、史には天皇と多く書てあります、國史に始て正しく皇帝と稱へました事のみえたのは、淳仁天皇の御即位の時に、百官や、僧綱が、朝廷に出まして、尊號を上皇に奉ッて、寶字稱德孝謙皇帝と申したといふ事であります、此時聖武天皇に奉ッたのが、勝寶感神聖武皇帝で、又其の少し後に、淳仁天皇の御親父の舍人親王に、崇道盡敬皇帝といふ尊號を奉りました、これはちと一時の流風のやうなものであッたとみえます、是れから後の、國史には、皇帝御二大極殿一などとは書てあれど、桓武皇帝などとは、決してかゝぬなり、但し僧徒の筆の元亨釋書の類の物には、天皇とかゝず、多く皇帝と書いてあります、先づ此れだけは、序で事の餘計の御話しであります。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

さて神功皇后の次は、飯豐天皇で、此の御方は、市邊押磐皇子の御女で、履中天皇の御孫で、男の御兄弟が二人有ッて、（即ち仁賢天皇顯宗天皇）此の御兄弟が、御幼年の時に、御父の市邊押磐皇子が、雄略天皇に殺されたゆゑ、難を避けんが爲めに、播磨國の人の家に、僮となッて使はれて御いでなされました所が、來目部の小楯といふ人が、御見出し申して、清寧天皇に、御男子がなかッたから、御世繼に定まりました、さて清寧天皇が、崩御の時分に、仁賢天皇は御兄のことだから、帝位に御即きなさるが當り前のところ、播磨國から御上りの時に、弟の顯宗天皇が、才機を運らして、それで皇子だといふ事が分ッたのでありますから、我れは位を嗣がぬと仰せられ、御兄弟の爭が附かぬから、中を取ッてといふ事でも無らうか、御姉様の飯豐青尊が、帝位に御即きになりました、然るところ在位、僅に九ヶ月で崩御になりました、それゆゑ日本紀では御歴代に揭げませんが、崩御とありまして、やはり此れも天皇の例になッて居ります、水鏡、扶桑略記等には、既に御世代の中に入れてあります、併し神功皇后の樣に、あまり編年ものに還入ッて居りませんから、まへに掲げた表には、一段下げて書きました、併し女帝の例には還入ります、其の次は推古天皇で、これは欽明天皇の皇女で、此のみかどは、時の變亂が有ッたに就いて、即位されたもので、此の御兄の崇峻天皇は、蘇我の大臣に弑せられ給ひし故に、其御嗣を立てるのも、馬子の心次第と見えまして、馬子の姉の生んだ推古天皇は、敏達天皇の後であッたが、今はヤモメで御いでなさッたから、馬子の勝手の宜いために、御立て申した事であらうと、先儒も論じましたが、其通りかと思ひます、尤も神功皇后、飯豐天皇といふ、女帝の例があるから、御立て申した事と見えます、其の時の皇太子は、かの聖德太子にて、用明天皇の御子で、推古天皇の甥に當る方で、毎度申す通り御發明な方であッて、我が國開化の先進として、此後御政事を唐風に改る基を起され、馬子と佛法を廣められ、至ッて中の宜い方であッて、皇太子になられましたは、二十二の時でありました、然るに太子は、帝位に即かぬ中に、四十九歳でなくなられました、此れは天皇が崩御の後でなければ、皇太子が即位する事を得ざるといふ、上代の例なる故であります、其の次が皇極天皇で、此みかどは、敏達天皇の曾孫で、舒明天皇の後で、天智天皇、天武天皇の御母でありますが、舒明天皇の崩御の時、天智天皇は、既に皇太子で御いでなされて、御年は二十八でありました、二十八では、後世では若くは無いが、其の時分では、御若いといふ譯であッたか、また其の時分は、蘇我入鹿が跋扈して、帝位まで窺ッたほどでありましたから、蝦夷、入鹿等が了簡を以て、皇太子を帝位に即けず、其御母を立たものでありませう、さすればこれも、時の景況仔細があッて、御即位の事とみへます。

皇極天皇在位三年に、天智帝は鎌足と共に、入鹿を誅戮されました、さて天智天皇は、最早帝位に即かれても宜い譯であるが、さうでなく、皇極天皇の御弟たる、孝德天皇が御即位でありました、さてそれからいたしては、明治の改革同樣に、大變動がありました、其大要をいはゞ、封建を郡縣とし、百官を設け、租庸調の法を起し、萬端支那の制に倣ひ、此までの政を御更へなされましたが、其の改革をなされるには、皇太子で居られた方が、御都合が宜いと見えまして、母方の伯父に、まづ位を御讓あッた事と見えます、孝德天皇は、御在位十年で崩御になりましたが、猶ほ御即位が無く、御母皇極天皇が、再び位に即かれても、太子で居られました、此の重祚の尊號を、齊明天皇と稱し奉る、崩御の後、天智天皇御年五十五で、始て御即位になりました。

其の次が持統天皇で、これは天武天皇の后でありますが、天武天皇崩御の時に、皇太子の草壁皇子は、まだ二十六で御若くもあり、又は先朝天智天皇は、齊明天皇崩御の後、六年の間、空位で御いでなされた、御後を追ひ給ひしものか、三年の間空位で、母后が政を執られました、日本紀に「臨レ朝稱レ制」とあります。

其三年目ニ、草壁皇子が薨去になりまして、そなたに御子がありましたが、（それが文武天皇である）其時まだ六歳の御幼年で有ッたから、是に於て持統天皇が、帝位に御即きなされました、これが皇太子御幼年の間の繋に、女帝を天皇と立る一つの例であります、それから文武天皇は、十五に御なりになッたにより、位を御讓りになり、御自分は太上天皇の尊號を御受になりました、其以前までは、三十四十でなければ、帝位に即かざる例であつたのを、文武天皇は十五で御即位になりましたのは、最早其の頃は、支那の風も移り、十五と云へば、成人の期であるから、そこで帝位に御即きなされたものと見えます。

其の次が元明天皇で、此のみかどは、天智天皇の御女で、草壁皇子の妃、文武天皇の御母であります、文武天皇の崩御の時、其皇子の聖武天皇が、まだ七歳で御いでなされたゆゑ、御祖母の御即位があッて、七年の間御在位でありましたが、追々御老年におなりなされたによッて、聖武天皇へ御讓りになるべきであるが、御年がまだ十六であるから、まづ御女の元正天皇に御傳へになりました。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

元正天皇は草壁皇子の女、文武天皇の御姉、聖武天皇には、伯母に當る方であります、此みかどは、九年間在位ありて、聖武天皇の御年二十四の時、位を讓られました、さすれば此の元明、元正の御二方は、全く文武天皇から、聖武天皇までの繋ぎの御卽位であります、此の二天皇も、讓位の後、太上天皇と稱へましたなれども、此の時分に至るまで、まだひと通りでは、御作法の中に、御隱居といふことは無いから、大寶令にも、太皇大后宮、皇大后宮の官僚は、中宮職とありますが、太上天皇の官僚は有りません。

さて此の元明天皇、元正天皇は、御兩帝で十六年間の御卽位でありましたが、御行狀が嚴しく、人民を御憐みが厚く、御政事に心を深く用ひ給ひしゆゑに、和銅養老が太平の時と稱し、又大日本史の傳には、「稱ニ謂之女帝賢聖一可也」とあります。

それから孝謙天皇で、此みかどは聖武天皇の皇女で、父天皇は、佛前にて自ら三寶の奴とお給へる如く、殊更なる佛法の歸依者で、おいでなされたにより、是迄に例のない、御在位中の讓位が御始めなされた事とみえます、それは聖武天皇の御年四十九の時で、元來女帝と云ふ例もあるから、皇女を帝に立ッて、朕は早く上皇になッて、佛道を修行したいといふ叡慮から起つた事であるから、孝謙天皇は、先帝の御思召を以て、女帝に立てられた事と思はれます、此の他の事は、歷史上に有りますから申しません。

其次は明正天皇で、此みかどは、孝謙天皇よりは、八百四五十年後、徳川幕府になッてからの事で、御母は徳川の二代將軍秀忠の女、御父は後水尾天皇で、寬永七年に、八歲の時御立ちなされて、久しぶりの女帝でありました、これは一つは時の勢であッて、徳川幕府に對して、立てられたやうでありますが、併し古への例を推されたものであらうと思ひます、併し御在位十五年にして、弟の後光明天皇に御讓りになりました。

最も終りのが後櫻町天皇で、これは寶曆十二年に、御兄の桃園天皇御崩御の時、桃園天皇の皇子の後桃園天皇が、まだ五歲の御幼年であッたゆゑ、御成人までの間、伯母として帝位に御卽きなされたので、後桃園天皇十三の御年、明和七年に御讓位になりました、これで御來歷は、大畧濟みました。

彼樣な譯でありますから、神功皇后は別物にして、推古天皇、皇極天皇は、時の勢によッて御卽位になり、孝謙天皇、明正天皇は、古く女帝の例があつたといふことで、女帝の御思召によッて御卽位になり、持統天皇、元明天皇、元正天皇、後櫻町天皇は、皇太子御成人までの繋ぎに御卽位になりました、されば我國の女帝には、彼此に三段の區別があると考へますから、同じ女帝とはいふものゝ歐羅巴の夫の有るものとは違ひます。

終りに臨んで、尙ほ一ヶ條御話ししたいことが有ります、大寶令の中に、繼嗣令と云ふものがあります、これはヨツギを定める法律でありますが、其れに斯ういふことが書いてあります。

凡皇兄弟皇子皆爲ニ親王一、

本註云、女帝子亦同、(これは當時製法者の註なり)

義解云、謂下據ニ嫁四世以上一所上レ生、(これは後に法學者の註なり)

とあります、

其の中に、「女帝子亦同」とあるは、女帝がまだ位に卽かれず、皇女でおいでなされ、皇族中へ御緣付で、御子が出來て有たな、御卽位の後、其の御子の事を云ッたので有りますが、ちよッとみると、女帝中に御配偶がある樣で、紛はしい事であります、尙ほ實際古典に據ッて、此の事の有ッたことを申さば、皇極天皇が、皇女で御いでの時に、用明帝の孫の高向王に御緣付きになッて、漢皇子を御生みになり、高向王がなくなられて、舒明帝の后におなりなされ、後に帝位におつきなされたと云ふ事實が有ります、一體令の本註の文が、許しいので、女帝の子は有るべき譯でないから、令中の難義となッて居りましたが、之を見出したのは、尾張の河村秀穎といふ人で、此の人が講令備考といふものを著いたので、人が氣が付きました、この本は寫本で、極少ないものであります。

先づ彼樣な事も有りますから、講令備考を見たことの無く、令ばかり見た人は、女帝に御配偶でもあッた樣に思ふかも知れません、其の義解に、「謂下據ニ嫁四世以上一所上レ生」とあるは、天皇の御子が一世、御孫が二世、曾孫が三世、玄孫が四世で、五世になると、皇親でない事になりますから、其の緣の絕えぬまでの御子でなければ、親王にはせぬと云ふのであります、此令よつきて、或は疑を起すおかたもあらうと存じ、此の話しを一段致すことであります、これで全く本論が濟みました。

善く攻むるものは九天の上に動く(孫子)。

批評

○漣山人の「初紅葉」　ふ、ち、

報知新聞の評は穿つたもんだ。曰く「文章は輕快趣向は淡泊編中唯少年男女の天眞爛熳たる愛情をのみ序述して其將に戀情に移らんとする所に筆を擱めたるハ落想最も妙なるを覺ゆ」と。我等も此數文字外に評するを得ず、強て評すれば讁天情仙と云ふ李白の樣な名の活眼家と仝案に陷る。別に拍案する妙處もないが大に非難する缺點も見へない。輕快淡泊の四字、是で此書の評判は濟んだ樣なものだ。

漣山人「娘作者」を作られて言文一致の惡る口を云はれたが、成程「初紅葉」の文章は美妙の樣にひねッてない。腦の奧坐敷ダノ浮氣な風の神ダノと云ふ嫌味な文句もチラホラ見へるが仝躰から云へば易らか……トント本所の町をブラ〱步く樣だ。美妙の文章は一轉すれば極めて野卑なる滑稽調となるが漣山人のは一步を誤ると紅葉子が所謂童崇調に落ちる。ひねるのも困るが輕快過ぎても困る。同じ輕快でも種類が有て鳥の毛が風に飛ぶ樣では面白くない。

趣向も其通り、デユマ派或ハベルチ流の驚天動地を唯一としては恐れるが——馬琴尊奉若くハ春水崇拜では閉口するが「初紅葉」でハアッサリ過る。淡泊も色々品々、せめて越の雪の如くあれ山の手の水ではあんまり……。讚て云へば淡泊有躰に申さば無味。

シカシ文章と云ひ趣向と云ひ、南翠のドラマチックでも春の屋のセンチメンタルでも學海居士の唐本宗派でも採菊山人の合卷流義でも眞似の出來ざる淡泊。美妙の樣にひねらず、紅葉の如く澁らず、輕快と云ふ旗を紫の紅を奪ふ世の中に瓶ノゾキに染められたる漣山人の腕前——見識。

五月鯉——初紅葉、いづれ劣らぬ外題。本文に適するや否や——それは兎にかく。艶ならず野暮ならず難かしからず容易からず、是も又淡泊輕快。

「五月鯉」では酒井光一——抱一派の末門と思つたら、今度は改姓したのでお父さんの酉井廣光——淸滿の流を汲むものにてもあるか。いづれ繪に關係があるから繪といふ事が三度まで出るも無理はない。

「油繪でよく見る樣な景色」(一頁)
「四條派の墨繪に似て居る」(仝)
「油繪の繪具板の樣で」云々(七十二頁)

繪計ではなく、仝じ樣な形容が幾度となく見へる。

「是を活人書にしたなら道に迷ッた吉田の梅若」(六頁)
「偶然の幻燈を演して居る處が」云々(八十頁)
「暫らく此の處……何と云はふか……作人の義は山本福松にござり升」(九十三頁)
最一ッ例を擧げれば、
「狹い胸の中でとんだり跳たり」(二十七頁)
「腹の中で相撲を取り初めたから(三十四頁)
「腹の中で内亂を始めて縱横無盡にあばれまわるから」(八十四頁)
「是が喜神に憂鬼が組打ちして居る處で」(九十頁)
先づコンナ具合に似た樣な文句がチヨイ〳〵見へる。氣が附かねば兎にかく氣が付て見ると誠にドウモ……。
ダッシやポチポチは必要の塲合に用ふるは結構なるが漣山人は何故に括弧を用ふる事夥しきや――是も必要の時は必要だが。其で縱横な文を作つたはサカレーだが其サカレーにもコンナに括弧はない樣だ。ないのを作るから新文脉かも知れませんが、それでは是を數學的とでも申すか。
文章は願はくは眞摯でありたし。日本で小說家を戲作者と云ふが爾後戲の字を取つてまじめにしたきものなり。滑稽物ならば兎もかくも眞面目なる「初紅葉」に諧謔の句調が交つては折角の興味をメチヤクチヤにする。例を擧げれば、
「笹波をよせて笑て居ます(蓮葉娘とは是から出たノデ)」云々(十四頁)
「知て云はぬは罪でおじやると語りめされナ語り申さうヂ」(五十九頁)
「一杯機嫌の赤松が蹚て居るのを大安樂をかいて眺めて居る大湖石」云々(七十四頁)
言文一致の嫌ひな人は是を以て立派な證據物件とするが、言文一致の迷惑を思遣らるゝ。「初紅葉」の中でも同じ樣でセンチメントは天地の違ひト云ふ二句を抄出せん。
「殆ど鋭き矢の根で胸さきのぶかに貫かれた樣に覺へた(中略)返へし矢を喰ふと思たか直樣顏をそむけてハンケチの橋を頰に當てた」(二十九頁)
「胸にピン……處じやない二ッ彈丸でヅドーン、その彈丸が咽へつかへて一言半句も出ない(六十五頁)
是を比較すれば忽ち解りませう。前者はシンパシーの心を起す事が出來るが後者ではドゥしてもフヽンと云ひたくなる。是等は作者の御勘考ものだ。

斯ふ並べてもみんな爪の垢ほどでもない瑕瑾。爰に大呼して賞揚すべきハ本篇の立案――作者の着目、是ばかりハ敬服々々。此頃の文學界でハ主人公は十六七の令孃と規則が出來た樣であるに、其フォーミュラ外にあどなき十三の錦子孃を生出されしハ御手際と存ずる。ダガ桃色の絹ハンケチは少し筆が――考が走りすぎた。「これハあなたにあげます」なんぞはチト長た振舞、錦子孃とは思はれぬ。着目は高いが痒い處へ手が……届きすぎて錦子のあどなさを奪つた。是も例を擧げて見ると可愛らしい錦子が大層才はぢけて思はれる。

「アヲ姉さん（少し俯向いて上眼で姉の顏をにらんで尤も小聲で）自分こそ。（四十八頁）

「ほんとに妾がわるかつたとチー堪忍して下さいよ……怒てヽ」云々（自八十六頁至九十頁）

其外ドウモ是でハ……と思ふ處も少しハあるが先づお預けとして都知新聞を眞似て――落想最も妙なり――と一生懸命で贊め申さうぞ。輕快淡泊の四字――「初紅葉」を續む人は念じ玉へや、南無輕快淡泊。

○烈士の血涙　三木喜一郎 譯

ブルータス、マスキユース、コスース、ジヤンダアーク、コロンヴエル、の五丈夫を傳す、人物を撰む所ろ、文章に發する所ろ、辭論を狹さむ所ろ、頗ぶる譯者の志を見るに足る。然れども志想文字ともに寧ろ漢的多く、築地立教大學に在る少年生の文としては頗ぶる異例なるを覺ゆ。

○痴蝶の刄　花月女史 著

碌堂、在一、兩居士の序もあれば正可にさは思へども、之を以て優麗なる女史の筆とは思ひ難かり。但し實に之を女性の筆に成るとするも、豈に夫れエヴハンス孃ダルビー孃が匿名初著したるの例に傚するを得んや。

○手藝教育論　岑是三郎 譯

マック、アーサル氏の原著を譯したるものと云ふ、今や手藝教育の事頗ぶる本邦の教育界に必要の問題となれり、此時に當て此の有名なる著書の譯文を得たり、大に賀すべし。

○百花園

文學上の近刊雜誌中此の百花園ほどに面白く且つ益みあるもの之なし、而して百花の中ち彼の「南無阿彌陀佛」の一篇ほどに面白く且つ益みあるもの之なし。思へらく紅葉山人の作中此の篇の如きは尤も秀でたるものなりと、然らば則はち紅葉は百花中の紅葉にはあらじ。

雜録

○蹈なく　末松謙澄 記

ふむなく草は草とて花こゝろ

とは四十七士の一人なる大高源吾子葉が書せし短歌にて予が藏する所なり、此歌や詞短しと云へども意味深遠にして所謂情もあり致もあるものにて一通り之を讀めば唯野邊の草花の憐れむべきを詠ぜる如くあれど深くこれを味へば誠に得易からざる教訓となすべし君たるもの之を讀まば民を治むるの意を得べし夫たるもの之を讀まば婦を遇するの道を悟るべく男たるものこれを讀ば女を扱ふの法を知るべく主人たるもの之

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

を讀まば能く婢僕をいたはり賢智なるものこれを讀まば能く遲鈍の人を愛すべく其他此歌を推して萬事に適用するときは物に接し人に對するにおゐて能く愛の眞義を實際に見出し人間の人間たる所以に恥ざるべし愛は人間社會の大本なり。

ふ、ち、

○人長技を異にす

スコットは雄渾奇抜なりヂッケンスは穿細精英なり。スコットを以てヂッケンスを難ずべからずヂッケンスを愛してスコットを退くべからず。スコットはヂッケンスに擬する能はずヂッケンスはスコットに擬するを得ず。共に長ずる處を異にすればなり。若し其長を捨て徒らに短を責むるは批評家にあらず。京傳と馬琴と其技を異にするは又此の如し、京傳に弓張月なく馬琴に小紋雅話なしとて是を毀るは未だ其人を知らずといふべし。アヂソンは流麗を以て勝ちスウィフトは麤宗を以て賞せらる。竹田は脚色に巧なり近松は文字に精なり。其他ミルトンの壯ポープの婉三馬の細一九の疎、人各々長ずる處あれば唯短を難して偏愛すべからず偏憎すべからず。彼も一代の名流、是も一世の名家。

○誇る所人各々同からず　　　螢溪仙史

ゼルマン聯邦の君達或時一處に會したることありしが其時各々我れ劣らじと己が領內に在る所のことに付て誇稱せり一人の君は其葡萄園の美麗豐富なることを誇稱して止まざれば他の一人の君は頻りに其領地內に在る銃獵地の優れて盛なることを唱道して口を極むまた一人の君は其鑛山のことを張大にして殆んど自得專擅なりウルテムベルグの公アベラードは今まで默然として以上君達の語る所を聞つゝ居たりしが漸くにして口を開きて云はるゝやう余が自ら知りて己れを以て甚だ貧弱なる者とせり君達の誇稱せらるゝ所一も余に於て之を有するとなし去れども余と雖ども亦た余が領地內に誇るべき寶物なきにあらず余をして今之を語らしめよ余若し從者一人の己に伴ふことなくして不幸荒野森林の中に行き暮るゝことあらんか幸に我臣民たる者のこゝに行遭ふことあるとき余は猶豫なく之に乞ふて彼れをして地に坐せしめ其膝を枕となして毛頭の懸念なく安眠熟睡することを得るなりと。

アベラード公の誇る所以を第一と云ふべし今の人多くは其他のむ所誇る所ろ此公の如くならず金銀に誇り園圃に誇り衣服に誇り冠冕に誇る思ふに斯等の類深く誇るに足らざるなりたゞ誇るべきは一家の主として一家悅服し一局の長としては一局謹愼し一省の頭として一省仰望し、身に寸鐵を帶ずして身は

戒嚴の中にあるものよりも易く、躬衛士の中に護られずして躬鐵壁の中にあるものより安く、行所として朋友ならざるはなく至る所として味方ならざるはなき是なり果して人斯の如くならんか其人以て纔かに誇るべきのみ、彼の冠冕の高き園囿の美の如きは未だ以て誇るに足らざるなり。

○屑を拾ふべし

山下石翁

天地の造り主は斯迄に廣大なる宇宙を所有し乍ら、一つの砂一つの草をすら無益には用ひ玉はず、皆な夫々の用を賦して必らず賢こく使はるゝなり、然るに齢ひを受る僅に七十年、産を持つと万にだも越えざる人間にて兎角に物をおろそかにして無駄に使ふは何事ぞや。　我國人の弊害とて、何故か經濟に細かなるを耻かしき事の樣に思ひ、寧ろ磊々落々として無頓着に浪費し、時には借金に首の廻らぬほどを特の外の名譽とする如きものあり、何の狂氣ぞ歎くに餘りあることなり。實に一物をも費さず、取締まり整然、經濟肅然として治まり、日に一品を餘まし、月に數十金を殘し、而して之を世の慈善有益なる事業に使ひたらんには其樂しみ幾干ぞや。　經濟に注意する人は實に天の御心に適ふもの也、神が與へ玉ふ一物をも大切に頂戴し、決して之を徒づらにせずして使ひ用うることは是れ何程の忠實ならんか、苟くも謹しむものは深く此の道理を考ふべし。　車屋は走るものなり、能く走ればこそ一町の途の遠きをも大層に言ふことあり、金滿家は巨萬の富を有つ、巨萬の富あればこそ一厘をも大切にす。然るに彼の無暗に走り廻るものは反つて遠きに至り得ざるの人にして、徒らに大盡風する人は亦た決して金あきの人なり。　大は小より成り、萬は一より初まる、凡そ經濟に用心するものは先づ一厘一錢の事に用心すべし、然れば一錢以上の金は其自身にて番をして無益に出で行くことなけん。イエス衆人に命じて坐らしめ、五のパンと二つの魚を取り、天を仰いで謝し、パンを擘りて弟子に與ふ、皆な食ひて飽き其の餘りたる屑を拾ひしに十二の箱に盈たり。嗚呼五つのパンを以て五千のパンと爲し得るの力ありとも、未だ決して其の屑を棄て玉ふことあらず。

○昔し同窓の友たりし人に送れる文

數百里の海山を隔て候事故むかし一つ學のやかたに在りし日とは異なり朝な夕なに御顏を見んよすがもなくたゞ雁の便に事よせて都なつかしき思の丈けを書れ候のみ憐れとも見そなわせかし、花の盛は早過て青葉がくれに珍しからぬ山杜鵑の聲もかしましき計りに成ぬ別れ參らせしよりはや二歳あまり

も經たりけん、都にありし日に比ては心も何となふせわし〳〵しからず山中無暦日と古しの人も云ひし如く木梢の花に春を知りさやけき月に秋の來ぬるをさとり夏の夕に軒端の風を賞し冬の朝埋火に古人を友とし或る時は淸き流れに糸を垂れまたある時は道野邊に草を摘み昨日とくれ今日と暮し〳〵さわいへ有しむかしの思われて姉妹の如き心ちせし我が友垣は如何に此の日や送り賜はん母の如くに思われし師の君達は如何に恙もましまさずやなど塾舎にありしその時に戀しき父よなつかしき母と思ひし心に引きかえ今は都の空のみ仰がるゝも愛の睦みに繫がれしそが爲めと存居候。庭の苔薔薇色も香もいとうるわしく咲き出しを手折りは手折りたるものゝ捧るべき君の居ませねばたゞ打ながめ候のみ定しやかたの園生にありし薔薇も美事に笑ひ候事と存じ候姉妹は簪に手折りやし給ふは家造りのさま園生の趣姉妹の御姿師の君が御氣色をその儘に寫せども吹き來る風に跡もなし跡し止ねばなほ更に戀しさの心したわしの思いやまさり參らせ候。夜半に嵐のもの凄く波の音さえしき妙の枕に通ふ折々は都の夢を破られて遇見し君がおもかげの幽かに殘る燈に昔を今と卷きかえす越せし君が水莖の跡に心を慰めんと思へば猶もおやにくに淚の雲に見え分ず愚痴のようには候へども日々思ひつゞけ參らせ候何卒御ひまの折も候はゞ御玉章戴度それのみ樂しみに御ざ候。

主によりてぞ　いつく志める　友の交は　とわにたえじ
世のわかれも　また天にて遇ふ　愛の睦こそ　樂しくわれ

我が身が君を思ひ參らする折君もわが身を思ひ給わんとろをうれしく存居候御姿繪も机の上にかざり置さ日々御めもじいたし〳〵御病身の御事故何卒御大切に遊ばされ度ひたすら願上參らせ候校中の何々樣へもよろしく幼かりし方々も定めし大きふなりたまひつらん我身ながら怪しまれ候迄に御なつかしく、くだらぬ事の走りがき胸の思の萬一を御さつし被下候ばありがたく存　候目出度〳〵かしく

花の香姉上樣　　優香里

○母に送る　　一孤兒

夜既に深く人亦た定る而して孤兒が夢未だ成らず百慮交も起る思遂に飛んで故山に至り禁ずる能はず即ち記して以て母に送る曰く、

母よ母上よ我が家は何故に斯く迄に不幸なるや數ふれば十年昔し我等が母は割れたり此の世に最早父君在さず我等は孤兒兄姉となりたり此時兒は甚だ幼なり

然れども幼心に感じたるの悲哀は今に至て尚ほ一日も忘るゝ能はず此の時御身の心は破れたるならん御身は赤兒を抱きて絶叫失望せられたるなるべし去れども兒は記臆せり爾來十年一日の如く御身の繊手は唯だ梭上に止りたるを人來りて櫻花咲けりと告ぐるも御身は顧み給はざりき秋夜月澄めるの時尚ほ機上にありて更に休み給はざりき嗚呼最愛の伴侶に別れて世界最大の不幸に遇ひて然も何故なれば斯く泣に忙しく働き給ふか然り實に兒女の口を糊せんが爲めなりしオー母ョ最愛の母ョ此の時如何に我等は御身の心を傷めたる少女は無心にして衣寒しと告げ兒等は筆紙乏しと訴ふ而して薪炭又た盡きて米櫃既に空し然も御身は唯た機上一滴の涙を濺ぎ給ふたるのみにして尚ほ其の手は織るを止め給はざりし嗚呼其の苦其の勞夫れ幾何ぞや兒は想像するヿを得ず夙朝より夜半に至る迄で御身の憂は唯だ兒女の衣食の上にありし此の時に當てや彼の美服彼の紅粉御身に於て何んかあらん其の兒と其の女は御身が最愛の寶なりしなり兒等は身襤褸を纏ふて人に賤視せらるゝも尚ほ喜びたり我が室家洋々たる母の愛溢るゝあればなり母ョ謝すオー我が母ョ謝す其の辛苦し給ふの時機下に受けたるの教は今日兒に切なる愛情を與へたり凡ての德性を發せしめたり人は言ふ先づ神を愛す兒は言ふ先づ母を愛すと其の母を愛する切なり故に又た神を愛する甚だ切なるなり嗚呼我か凡ては母の賜なり思ふて此に至り涙落て襟を濕す今や膝下を辭して此に三歲経始新る所は唯だ御身のとなり兒が學を勉むるも亦た御身の愛に勵されてなり母よ最愛の母よ願くは尚ほ暫く兒が爲に忍べ今より後數年ならば幸にして御身に衣食の願なからしむべし又た幾分の樂みを捧ぐるを得べし母よ憂ひ給ふ勿れ十數年隱れたる御身の辛苦其の功績よし歷史は之を記せずとも天之を知り兒が心之を銘せり噫ひ要するに天下を以てすとも兒は全心を擧げて我が慈母を愛せん。

生常に先生の高論清德を敬慕し竊に知己の情あり故に之を示して先生の同情を求む頓首。

最後まで笑ふ人こそ尤も能く笑ふ人なれ…………の
然れどもシヤレなきゝ二三分をあてのち久しく笑ふ人は何如に

○緣事最も大切なり

木公子

天正の頃、本阿彌光悦とて、刀劍のめきゝに精しく、書を能くし、人となりも高くして、家康公をはじめ、諸侯に厚遇せられしが、其母妙秀と云へるは、たぐひまれなる賢女にて、言行の傳ふべきもの多く、今の人々の心得となるべきものもあれば、此に空中齋草鈔より、其一二を拔きて示すになん。

(前畧)ことに、にぎわしきをこのみて、金銀もちきたるよめをたづぬるは、ふがひなし、わざわひのもとなり、かねをたからとこのむべからず、一大事の兄弟中惡しくなり、耻をさらすも、多くは金ゆゑなり、ひんあるものゝ死したる跡に、兄弟の中惡しきはなし、かねをもち來るは、よめのためにもよからず、何事に付ても、かねを持きたるゆへに、きづいありとをもいるべきかときづかいにて、殊の外身持むつかしかるべし、又かしこき男ならば、金持來る女なるゆへに、あまやかすと、人目はづかしくて、さわらぬ事にも、目をひからかし、夫婦の中もあしかるべし、又女の心いさぎよく、かしこくば、持來りし金を、男に打まかせ置かば、誠の夫婦の心地すべけれど、男よりも金を大事にをもひて、へだてある目の色を見るならば、扨てもいやな事あるべし。人の身の大事は緣ぺんあり、夫婦の中たがひに大切ならば、いかほどわびしともたへぬべし、をもあひたるものは、親をすてゝはしり行くならいもあり、よく深かくはなのさきのみちゑのある

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ものは、有德あるをのみ、よき事とおもひて、われにすぎたる婿をとり、よめをとるあさましき事なり、むこのかげにて、世をわたるものは、是非におよばず、むこもよめも、誠の我親あり、我子なりとおもふほどの、心ざしあるものをこのむべし、われにすぎたるむこをとれば、わたらむすめを、こしもと、まかない人の如くなすは、富貴をこのむ故なり、又われにすぎたるよめをとれば、萬事花麗になりて、我家の作法ちがひ、かならず〳〵家のほろぶるずいそうなり、たゞ〳〵大身も、小身も、身の分際に應じたるをこのむべし云々。

何某とかやいひけるものゝ、さぶらひのむすめを、めとりけるが、子を一人二人うみて後に、疱瘡をして、みめあしくなりたりとて、去りいあせける、はじめよりも、いよ〳〵大切にすべき事なるにとて、人々見かぎりける、去る事のならざる女あまたあり、親のある時もらひて、おや死して後、さらざるなり、又おやの身上おとろへて、後さらざる事なり、又さかりすぎて、去らざるとなり。光悅の弟子に宗智と云ふものなり、京中にかくれなき、大正直ものありしが、かの妻を離別せしものと、とき〳〵つきあひけるを、妙秀きゝて、世にかくれなき畜生と、ともなふものは、則ち畜生、我子にあらずとて、勘當しけり、これはあまりの事なりと、人々申しければ、我もさやうに思へども、わが一類多ければ、かゝるぎりちがふものもあるべきかとおもふ故に、見せしめなりと申ける。又本妻年よりぬれば、懇ろうすくあり、男の心きづいはうらつにて、成人の子供の、おもふ所をもはぢず、本妻の心をいたましめ、義理をしらぬものありと聞は、さやうのものとは、かならず遠ふざかるべし、義理を知らぬものは、かならず災難きたるなりと申き。

○愛より生るゝ勇

三　篤　生

勇にも類あり君子の勇あり匹夫の勇あり道德の勇あり血肉の勇あり而して其基く所ろ亦同じからず正義の爲に激勵せらるゝあり義務の爲に鞭撻せらるゝあり名利の慾に驅逐せらるゝあり性來無情妄進恐るゝ所を知らざるに出るあり而して其最も高尙にしてしかも當るべからざる者は至愛の情に發する所の勇なり試に男性の勇の最も高尙猛烈なるものを見よ彼の君を愛するの情切なるより出でゝ忠勇敵なき者國を愛するの情切あるより發して勇猛當るべからざるもの此類の勇や史上尙生氣を留めて遺精今人を聳動す又試に女性の勇の最も高尙猛烈なるものを見よ彼れ其良人を愛するの情至切なるより顯

はれて貞烈向ふ所なきもの其子女を愛するの情盛んなるより燃えて剛毅無双なるもの此等の勇眞に敬服すべきの勇あり眞に貴重すべきの勇なり此勇や其平生にありては優遊緩徐恐るべきもの無く驚くべきもの無し暴に險を冒さず慢に威を示さず近寄るべきなり親むべきなり慕ふべき也喜ぶべき也今夫れ大海洋々其平日に在りては包容廣濶にして孤舟浮ぶべく小魚戯るべしと雖ども大風一たび來りて之を激勵するに至ては慓跳暴怒天を蹴て日を呑んとし岩を齟んで玉を取らんとす此時に當り大魚恐惶して深淵に匿藏し艨艟避易して港灣に屏息す勢ひこゝに及んで誰か大海の侮るべきを云はん。

至愛の情より激發する所の勇は蓋し此類の勇也此勇よく國を護るもの此勇よく城を衛るもの仰て君を安んじ俯して民を幸福するもの乃ち此勇あり男子獨り之を有せず女子亦之を有す少壯獨り之を顯はさず老成亦之を顯はす蓋し至愛より生るゝ眞正の勇は男女を知らず老少を辨ぜずたゞ眞愛の存する所ろ時に及んで發揚するあり聖經に曰く、

愛は寛忍をなし又人の益を圖るなり愛は妬まず誇らず驕傲らず非禮を行はず己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を念はず不義を喜ばず眞理を喜び凡そ事包容凡そ事信じ凡そ事望み凡そ事忍ぶなり愛は永久も墮ることなし。

眞愛の眞相實體則ち此の如し而して一たび事あり物ありて之を激するや忽ち壯烈抵抗すべからざる勇となりて顯揚す聖經又曰く

「愛の中に懼あることなし全き愛は懼を除く」と

眞に然りとす親にして其子を愛する至切ならんか其子の爲めに何事か爲し能はざらん妻にして其良人を愛する至切ならんか其夫の爲めに何事か爲す能はざらん君を愛する熱きときは君の爲めに死を輕んじ國を愛する切なるときは國の爲めに身を惜まず眞正の愛にして國民の中心に存せんか何ぞ必ずしも兵力を云はん眞正の愛は護國の楯なり愛より出る眞正の勇は尊むべきものなり敬ふべきものなり此勇や天下に敵なし。

○古鄉の天　　刀水散士

おもひいづれば世の中は定めがたなき物ぞかしはや乳の齒のぬけし頃ふるひ起りて故鄉の恩愛厚き父母や交誼もふかき友垣とみなとのふちに手をわかち赤城がもとの小庭や學びの窓に身を寄せてはてしもわかぬはてひろきはどもあられぬ底深き泥商ゝさ打揚る社會の海に絲よりも細き此の身に露よりも弱きこゝろのひさつ櫂で樹もしどろにこぎいだし西や東や北南又ある時は上下さゆりたてられていさゞーく只父上をなつかしみうれひに沈む折柄に四方に聳えし山ゝは皆白妙に埋れて越の國より吹きあぐる風もやすく犯し得ぬ我身にまとふきぬ見ては又我が慈母をおもひいで首うなだれてしばたゝき落る淚をせきあえず窓打あけて見渡せばみどりこぼるゝ松か枝もうた[illegible]たえぬ谷の音も入日のあさに大空をはね打かはし行く鳥も我が目に觸るゝ物事は皆うきとのたねなれど胸打あけてとも〴〵にかた

らふ友ハ隔たりてよろべなぎさの捨小舟げにやむかしの壯夫が嵐の山の秋のくれ紅葉のにしきぞが中におもひおきにし妻子らをまたふてなきしためしさへ今ハ吾身につまさるゝ

君が述懷のふみを讀みて　白石文洋

いざさらばわれも見せなん捨小舟
　おなじなぎさにぬるゝたもとを

○玉堂隨筆（四）　南石外史

躑躅花と蜂

此項ろ躑躅花に蜂虫の遊ぶを注視したるに頗ぶる奇を覺へたり、蜂は花筒を際りて筒下の蜜を吸に出る時常に急に飛び出でべきなるに彼は徐々花糸を抱き據るが如くにして上に登り來る故に粉粉悉く其腹に附着す、去て他の花筒内に入る大抵柱頭に觸る此の柱頭の直立せずして少しく曲向するゆえに此の便を供ふる也、偶ま一蜂飛んで花筒内に入る直に亦飛んで出づ從ち之を注意するに筒内ヨ入りて直ちに出るものは則はち花糸ヨ據て登らざるが如し流し直ちヨ出る時は則ハち筒下に蜜なきの時なるべし蜜なきの時は粉粉未だ全く發成せざる時歟この時則はち蜂の據て登るとを要せざる也これ或は蜂と花と相適應せるものなるべし、然れども久しく筒内に在りたるものは何の故に攀り抱へつゝ登る乎思ふに腹飽き充ちて疲勞したるが如きとあるにあらざる歟未だ理を得ず。

理性と經驗

理性は只だ經驗ヨ由りて得たりとする乎而して理性を以て萬物を解し得べしとするは何んぞや未だ經驗せざりし所の者を如何に解悟するを得んや、若し既に經驗せし所ろに由り論理上に推窮し未だ經驗せざりし所のものをも尙ほ解悟し得べしとするか論理上に推窮する所ろのものも亦た經驗に由りて成れる理性にあらずや然らば未だ經驗的に得ざる昧棣の論理を以ては推窮すると能へざるべし、故に人智を無極の者とし理性に由りて人は萬物を解悟し得べしとするは此論者の當に言ふと能はざるべき筈也。

速かに爲せ

人の手紙に答ふる返事などは成べく速に認ため置はすべし出來ざるとならば致し方なけれども出來るとならば之を速やかにすべし手紙に限らず何事も然なり爲べきとを爲ざるときは彼を爲さゞる可らず彼を爲さゞる可らずと思ひ續けるゆへに心常に忙わし出來ざるとを爲さゞりしときは左樣に思はざるゆへ斯る事の多く集まり居るとも左程忙わしく思はぬなり常に忙はしく思ふ人は爲し得べきとを爲さずに放置せる人なるべしとも思はる此れ余が實際の經驗なり、又事を理するときにも能く考へて尤も急にするものより之を爲し少しにても急を要せざるものは尤も急を要するものの次に廻はし斯くして順々に爲すときは常に切迫の事なく忙はしさも思はざる也、才子閑日月あり又英雄雅情ありなど云ふは此邊の心得ならん。

正月と一月

舊時は月を基ひとせず歲を基ひとして年齡を數ふ故に正月の來るは一才を加ふるの期なりさし題つて之を稀れに在るとさし「再たび來べき春やハ」とも云ひたりしが今は月を基として考ふるゆへ何も平生と變はるとなし。

輕口〱

○殘りおほい妻の別れ

ある者妻に死なれて物さびしく暮しける折ふし友だちの方より愁を拂ふ箒とかや申し候へバ之にて少し欝氣を晴らし給へと酒を送りける、幸わい心やすき人居合せければいざ一つと云ひて樽をあけしに呑口出かねければ居合せたる人見て風穴がないゆへじや樽の上に錐穴をあけられよと氣を付られ穴をあけたれば案の如くどぶ〱と出たり。時に亭主樽にいだき付きなみだをボロ〱とながす、かの人何としたる事とおどろきければ亭主泪をおさへ扨も〱殘多う御座る、御存じのとをり女房儀は産後に小用が通ぜずして死ました斯る療治が

御座る物を何故云て下されいで、もし女房が頭まに錐もみをいたしたらば小用が通じましやうにとて又さめ〴〵と泣た。

○喰ふて知る一文饅頭

鳥に鳳凰あり鳥あり、草に利根草あり鈍根草あり、或る所ろに異名を一文まんぢうと云ふてとつと案のない歴々のお方おはしけり、夜ばなしの序に何と蓼草を好いて食へば利根になると古しへより云ふが十日餘り食ふて見たれど變つた分別も出ず又茗荷は鈍根草にてさい〳〵食へば阿房になると云ひつたふ程に之も此中毎日食すれども其覺へもない、之には世間の人が昔しからはまつて居る家中の者どもにぬかるなと仰せあれば、御意に入りの竹庵が申しけるは蓼草はきゝませぬさうなが左樣に御意なされますればみやうがは餘程きゝましたさふに御座りまする。

○茶臼にあふむがへし

物皆あ限りなき憂き世の樂しびと玉川の流れをくめど、とつと吝い人ありしが左る者茶臼を借りに遣りければ其返事に茶臼をよそへ貸せば僻が付いて悪う御座る此方へ來て引しやれと返事す、先の人腹を立てゝ扨て〳〵しわい奴かあ何がな此返答をとおもふ折ふし彼の茶臼の主より梯子を貸し玉へと云ひ遣りければ、幸わい哉と其返事に、はしごをよそへ貸せば狂ひますするほどに上るところがあらば此の方へ來てあがらしやれとくはせた。

兒籃

○子供の旅路　（其二）

友鶴軒

穴の中に落ちましても幸ひ怪我もいたしません、上へ再び昇り度と思ても登る道も見へずたゞ茫然と立て居りますと後ろの方よりムツと計りに私の手を捕へた者があります驚てふりはなさんといたしてもなか〳〵の大力にて動く事も出來ません、かの者は私を小脇に軀てひつかゝへ疾風の如くに走り出しました道の四五町も參たと思ふ時前に一つの門がありましたがかの者はこの門を蹴開き中へ飛び込み私を床の上へ放り出しました息もたゆげになりましたがそも此處は何處ぞと見上ますと入口の上に蛇巣殿と云額がかゝつて居ます部屋の中は血の跡あどが所々にあつて人の骨なども散らかつて居り堪へがたき臭がいたします私を捕へたかの者は戸の外へ出ましたがまたふたゝび戸を開て這入て來ました故よく見ますと身の丈が八尺計りの猿か人かと思ふような怪物です、小脇に一

の袋を持て私の傍へ來り私にその袋の口を開けと申しますから氣味惡く思ひましたが云ふ事を聞かねばつかみ殺しそうな勢デス故ソット開ますと中には數々の金銀珠玉が一ぱい滿ちて居ます、かの者はよくこの金の數を勘定してソシテ此處に張面があるから此の帳面にかいてある金銀の數と合ふようにしろと申し置て表の方へ出て行きました私は帳面を開て見ますと金銀の高がくわしくかいてあります又袋を開て勘定をしますと美しひ金剛石一つと金の指輪が余計デス其時私は心に金剛石と金の指輪はあの怪物が數へそくなつたノダカラこの帳面にかいてないのダローカラ、ソットかくしへ仕舞ても分りますまいとフト惡い量見を出して懐中へ入れしらん顔をして居ますとかの怪物はまた歸て來ました、私の顔を見ていとゞ恐い顔の上になほ怒りの面色を顯わしまして、口の中で何か云て居りましたが私が勘定したかの袋の中の金銀は忽ち數萬の蛇と化して私を取りまき手足の分ちなくまとひ付き鋭き歯にて噛み付きます私はヒイ〳〵と聲を立てゝ泣き叫びますとかの怪物はうれしそうに私を眺めてニヤリ〳〵と笑て居り私が苦しめば苦しむ丈け喜ばしそうデス、私は全く惡の擒となつたノデ人の物を取ると申すような情ない境界に落ちました故此の報が在るノダと覺悟をして居りますと耳の邊で起す人があります目覺て見れば母が溢るゝ計りの愛のおもゝちで私を呼ダノデ、身は蛇集殿に在らずして朝日のうらゝかにさす我家の床に臥て居ました。

世の中にはいろ〳〵の恐しひ事があります、はじめは唯だ風の吹く音か何か寂しひ位ですがだん〳〵と道ならぬ事をして行きますと終には狼も出て來ます折角よい案内者があり正直なる杖を與へられても先きに何か恐ろしひような事があるとすぐ失望してふたゝび罪の穴におちいり自分は苦しひ場合に置かれてもなほ金銀をむさぼり過てその身は死ぬ苦しみをいたしますドーゾよく浮世の旅路を氣を付て歩で下さい決して惡い道にふみいり賤ふな惡い心を起しても直ぐに悔ゆれば母の顔も見る事が出來ます朝日のうるわしひ影にもやすみ得るでしよう決して正直の杖を手ばなしてはイケマセン。

史傳

○女詩人、女文學士

當今女秀才益々起り出んとす、然れども彼の善く歌ふ吟聲の下より紛々たる臭氣を放ち、巧みに綴る文字の錦に見るだに厭ふ醜徳を混じ、歌文には天使の如くなりて一身には放蕩淫猥の浮女たるは其の善く歌ひ巧みに綴るとの彌よ高き程に嫌あると亦彌よ深し。社友田村君モラク女史の傳を送らる、希はくは今後の女秀才宜しく此の如あるべしと、則はち之を掲ぐ。編者白。

○ヲリンピア、モラタの傳

田村武治

伊太利は山水秀淑にして文物典麗なる地なれとも未だヲリンピア モラタが美質に若かざるべし。オリンピアは一千五百二十六年に生れ父をフルゥビヲ ペレグリヲ、モラタと云ひ道德文學を以て當世に鳴り遂にアルホンソ侯に聘せられてイポリト及エステ兩公子の師傅たり左れば當代の俊髦一時其門に聚り彼の有名なる博識卓見家レニー侯さ遊ぶものは必すペレグリチ、モラタの友ならざるはなかりき。

ヲリンピアは如此く幼少の日より哲學文學の諸大家に圍繞され平居父に從ひて希臘羅馬の古文學に關する事を聞きたれは乳臭の口既に能く古文字を記誦せり既にしてヲリンピアは父の友シナピに從て希臘語を學びたりヲリンピア夙に神秀の聞ありて深く諸學者の愛する所となり一たび之に接するもの其才智秀發應答流るゝ如きに驚かざるはなしセリヲ カルカグニの如きはヲリンピアを評して幼稚なる歌神なりと曰ひしこそ彼れ其後書をヲリンピアに送りて卿の詩歌に長ずるは蓋し能く家風を承くるものと雖とも天殊に尤物を賦與せしと云ふべきなりヲリンピア性素より學を好み螢雪の樂に餘念なかりしも敢偏執の弊なく能く詩人の高逸なる理想社界を降りて卑賤なる人間の狀態をも勉め學べり然とも幸にしてフエララ侯夫人の其公女の爲めに眞學友を求むるに遇ひしかばヲリンピアは宮中に入り是より一層勤學の便を得て渉獵益該博なり。

時に公女アン子 エスタが秀才の名遠近に隱れなかりき公女はヲリンピアより弱き五歲頗る眞友を得しとを喜びて深く相結托せり斯てペレグリヲは寵女の名聲日に高きを加ふるを喜び日課の外更に自ら論辯記誦の法を敎へしかは聲音態度能く規律に合し學士文人の一たひ之を聞く者をして咸な其の巧妙に感歎せしむ歲十四の頃シセロの論を著はしてカルカグニに送りしにカルカグニ稱讃して已ます其の書籍舘中にて最上なる眞書とこそは貴重されたり十六歲にして希臘語の歌を著せり又以て當時既に志想の高潔なるを見るに足れり其歌に曰く、

人の心は一樣に同し思想を持ち難し、我れ身は女に生れしも心は衣服の外に在り、パアーナサス（希臘人の尊崇する山の名也）なる高峯より雲井遙かに響くなる神女の歌の美はしさよ是ぞ我身の樂ぞ他し女子は一樣に他し物をぞ好むなれ、

扨も三百年前にレニィ公宮にて斯る高妙深遠なる理想の斯る妙齡の淑媛に發せんとは抑も奇異なりと云へし左れは當時學者の評に古の閨秀詩を善するものはブヲキシヲ、サツポー及コリンナ、あり然れとも未た嘗てヲリンピアの右に出ずと然と雖とも榮枯盛衰は人世の習にて佳人薄命多しとは後にヲリンピアが身の上にこそ知られたり。

瑤臺瓊閣の中宛轉たる娥眉多し況んや皆詞藻富贍にして唾餘玉を凝すの文才中にはラウビニア デラ ロベル公爵夫人マダレナ デ セリ侯爵夫人及デランゴチン伯爵夫人ありて共に容貌の麗才思の美は當時を壓せり而してヲリンピアは斯る眞友と風月を娛み彤管を操りて爽然として身は羽客の群に入るを覺へたり然れとも當時此等の貴夫人は羅馬敎を忌避して頗る改革派の說に傾きしより談偶ゝ哲學及宗敎上の問題に及ふ每に屢ゝ疑惑の念を抱くに至れりヲリンピア獨り思ふ樣近頃上帝の道を疑ふもの甚はた多し蓋し之れ新舊約書を讀みて迷を生ぜしに由るなるへし若し余にして久しく此宮中に在らは疑心益ゝ張りて遂に救の道を失ふに至るへし。キユルス エステ公の別墅ベルビデルに在り宏壯眩燿にして山水幽美曲欄廻廊此間を點綴し玉階或は淸流に臨みて其下沙禽の游泳するあり其他禽獸花卉凡そ以て耳目を慰むべきものは遺さとして致さゞるはなく宛然たる人間の樂園と云ふべし嗚呼ヲリンピアは斯る富貴に生長したるも恰も是れ邯鄲枕上の一夢に過ぎずして後來の身世に取りては最も憐むべきとなりし然れとも神の愛は常に驕るものを損して謙するものを益し玉へばヲリンピアが心を戒んとて頓に生涯を移されしものと知らる。

今は昔に事換り變り勝なる浮世とて涙の雨に袖濕す乙女の父は病苦より遂に還らぬ旅出して神の御國に入りにける去る程に斯まて契り深かりしアン子エスタ公女はグイス公に嫁するのみならす母御の心も讒言の爲に一變し剩へハーキユルス公も同く奸佞の惑はす所となりて深くヲリンピアを惡みしかは今や始めて雲上人の恩寵こそいと賴み甲斐なきものなれとて痛くも浮世の輕薄なるを歎息せり折しも家計富饒ならずして老母の外四人の兄弟ありければ養育の責任一方ならず深き悲哀の中に在れども今や決して他人に依賴すべからす獨立決行は吾か分なりと信したり嗚呼嘻昔の夢の榮華は仇にして眞の人の樂は金銀珠玉の外にあり茅簷竹籬も心廣く體胖かなれは行是れ至樂の天國ぞ。

斯て家事の餘暇には妹を敎育し自らも亦文墨を弄するを以て無上の娛とせり時に最も熱心なる新敎信徒にして羅馬法王の仇敵視する人ありけりヲリンピアと交情頗る密にして偕老の契もいと淺からすとは知られたり ヲリンピアは同人と共に

ファニヂの牢獄を訪ひて幽囚の苦界に異教信徒を慰めしが當時ロヴェル侯は大に福音の眞理を發見せり是頃にはフェララ大學には多く外國よりの留學生ありて其名最高かりしシュツインフォードの人にてアンドリューグランスラーなるものありて夙にチリンピアの英名を聞き敬慕の情に堪へざりしが既に相識るに及て意外にもチリンピアか飄零流離の情況を見て愛憐の情堪へ難く遂に伉儷の意を通せしにチリンピアは頗る丈夫の知に感じて之を承諾し一千五百五十年リフォームドチョルチに於て自著に係る希臘語の歌調のいと美しき中にいと質素なる婚儀の式を擧行せりフリンピア今は陋巷に在りと雖も唯た高邁なる良人に遇ふて其樂怡々如たり。

結婚後程なくグランスラー博士は教官の職に就んとて故郷(獨乙)に還り獨りフリンピアのみ留めたりしに又親しく往來せしジョン、シナピ兩學士もフェララ慈恵院の瓦解に由て同しく故國に歸り獨りロヴェル侯の留るあり去ればフリンピアの無聊言ん方なく日夜ロヴェル侯と論辨雜話して僅に孤棲の鬱を慰めけるチリンピアか良人を思て送りし書中に

嗟呼世間何物か能く吾か良人を愛するの情を寫すものある、若し之れあらば吾は決して身を擲つを惜まず必ずや其術を知らんと欲するなり。

六月初旬に博士は再び伊太利に還れり然とも當時本國は陽九の運に際して文物の制度頗る腐壞せしかば遂に志を達すると能はずフリンピアは欣然として更に旅裝を整へ其母と兄弟は遠く親友ロヴェル侯に托し初夏の候良人と共に羇程に上りけるフリンピア喜壯勇敢義務の存する所は死を辭せずとの決心あるものなりと雖とも別れに臨みては惜々の情に堪へず頻りに悲哀を催しつ途中山水の明媚なるも將た花鳥の閑雅なるも流石に詩人の心にも今は錦繡を開くに由なく悄然として物思しげに見へにけるフリンピアは筆を染め一束を展へて、

上帝良人を賜ひしより我之を愛すると吾身に優る去れば良人に伴ふことなれは假令カウカス山中人跡を絶つ幽谷にても又はアルプス山外寒冱の絶海にても欣然として相從ふべし、唯く良心の自由に依て上帝の命に從はゞ青山到處吾故郷のみ、極南極北吾に於て何の距離か之れあらん。

關門も恙なく過ぎ程なくオーグスボルグに到着せしかば、博士の兄弟なる紳商フヒッガー氏は迎て其家に伴しに門戸壯嚴僕從命に奔る又議員ハルマン氏に厚き招待を受け博士夫妻は玆に數月の間優遊以て歳月を送れりフリンピアは書を伊太利の豪傑コリアス セカンダス キユリフに寄て(氏はチリンピアが亡父の親友にして嘗て流罪に處せられたり)又囚徒ファヂナの爲に書をロヴェル侯に送りて義妹ヤダレナフーシナと共に不屈の熱心を以て囚徒解放の事業に盡力せしが不幸にして其志を遂する能はず歴史家の評に當時羅馬法王が異端撲滅の殘酷苛酷なる人能く之に逆ふもののなきのみならず動もすれば黨與の疑を蒙るを以て天下屏息して復た囚徒の爲に其寃を訴るものなし然るに獨りチリンピア姉妹あり閨媛か纖弱の至れるものよ及では柔能く剛を制すべく實に驚歎の外なきなり。

グランスラー博士は未た住居も定めず飄然としてオークスボルグを去りウヂルスボルグに到れば親友シナピ學士の家に寓せりシナピ氏はフリンピアが昔の教師にして其妻フランシスカブイクロニアは幼年の同窓たり左れば一時秀才の邂逅に文雲詞花燦然として閑窓に開き又は家事にも鞅掌しつ覺へず陶然として三冬を經過せり折しも博士は故郷なるシュワインフルトの市民より鎭臺の醫官として招聘せられ同地に赴けり偕てチリンピアは年頃交深かりし友に離れて極北荒寒の地に移りしに言語の疎惡にして之を解する能はざれは何とやら寂寞として頓に別乾坤に移るの思あり既にして又議官ハルマン氏の推薦に依て羅馬王よりリンツ大學の教授を依囑されたり然れとも宗教の自由は之を禁ぜらるフリンピアは上書して恩命を辭しても上帝に對する節義は決して挫く可からざる旨を開陳せしと雖とも遂に納れられず此時に當て伊太利にて基督教徒迫害の騒起りしかば交友の書信も久しく絶へ漸く一年有餘にして一報に接すれば豈圖らん最も親愛なるファンチは教の爲に殺害せられたりチリンピアは良人と痛く之を哀み又幸にしてロヴェル侯夫人の恩に由りてチリンピアの母及妹は恙なきを得たれともフリンピアは是より巳を得ず斷然故郷に還るの念を絶たり去れば日々文林に心を遊び又弟エミリチ及シナピ學士の令嬢を敎育するを以て樂となし且つ先人の遺書中に吟嘯し或は貧苦疾病を慰問しつゝ覺へず復た一年を送れりフリンピア家素富に非ざれとも清廉和靜其に關睢の樂ありフリンピア時に詩篇を希臘語に反譯すれば博士は之を樂器に調し文人詩友と倶に之を諷ひ又は理非を研究する等いと樂く見へにける。

忽にして戰鼓の聲四に起りブランデンボルグの大守アルベルト侯は兵を擧てシュワインフルトに本營を築きメイン河邊殺氣凜然として復た昔日の觀なし斯て隣國の諸侯兵を起して之を討伐し十四ヶ月間は砲烟彈雨の巷となり慘烈殆ど筆紙の盡す所ろに非らず淹留月を渉りて戰雲未た霽れず九ヶ月の後博士夫妻は地を穿て穴

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

居するの已を得ざるに至れり斯て坑中に居ると數旬にして博士は大患に罹りしも當時騷亂の際市に購ふべきの藥餌なければ所持の藥は程なく盡き果てゝ今は賴むべきものあらざればヲリンピアは獨り天に仰ぎ地に俯して唯々上帝の冥護を祈るのみ前途の艱難之に倍するものあれども博士夫妻は物ともせず泰然として能く之に克てり既にしてアルベルト侯兵を退しかは討手の兵は火を放て其宿を焚けり時に一人の兵士あり夜に乘じ博士及家族を扶けて郊外に出しや否一隊の敵兵に遇ひて衣服は切奪せらる憐むへし博士は擒に就けり。

斯てヲリンピアは良人の身を思へ獨り心に神に祈り其安全を願ふのみ 暗夜咫尺を辨せす敵兵行くと十餘里然るにヲリンピアは衣薄く靴なく裸跣岩石を踏み 雪肌肉を劈き足跡血を印す高貴に生長して文林を渉獵せしものは素より柔軟にして健歩に堪へず然るに殘忍にも斯る境界に陷りて其死せさるものは唯だ一貞操あるに由てのみ其ハユボルルグに達せし頃は目も當られぬ慘状なれは一女あり惻隱の情に堪へずやありけん破れたる衲襠を與へたれは恰も是れ一個乞丐の女王を現出せり第四日目に至りてヲリンピアは苦痛に堪へず身の成行は天に任せ暫く足を留めんと決心し次驛に着する時シユワインフルトよりの亡命者は盡く死刑に處すへしとの揭示あり去れは博士夫妻は一時屠場の羊さなり空しく幽囚せられしも幸にして大僧正の赦免狀に由て解放せられたり。

遂にヲルパツチ伯の家に寄りしに恩待頗る渥隆なれは始て萬死中一生を得し心地せしもヲリンピアは曩昔の艱難に痛く身心を勞せしより疾を發せしに伯爵夫人エベラルは躬から病床に侍して湯劑の勞を執れり疾稍く怠りし頃には數多の令嬢は母御の慈愛に感し競て病者を慰撫せり夫人は更にヲリンピアの爲に厚き贈物をなせしか其中に一外套の一千ヒラウン(貨幣の名)の價値を有するものあり從來病床は日月長けれとも閑窓の下錦帳の中温厚慈愛の淑女さ半臥を共にし或は幽邃なる庭園を徘徊し水邊に沿て涼亭に登り閑談興を移す等覺へす苦惱の日を送りけるエベラルド伯亦深く基督敎を信じ每朝必す家人を聚め禱禱に至るまで悉く聖書を聽き又祈禱に與らしむ又た躬親から貧家を訪ひ慈善の道を奬勵するを以て已れか責とせり既にして伯はグランスラー博士を周旋してハイデルベルグ醫科大學長となせり而してヲリンピアには名譽夫人の位を贈りしも斯る榮華の特に足らざるをは既に經驗し來りしとなれは固く辭して之を受けさりしなり。

夏の初グランスラー博士は家を擧てハイデルベルグに移りけるに人皆其不遇を傳み最も鄭重なる待遇を與へたり特にヲリンピアが亡父の友人は其高名なる書籍庫の兵燹に罹りしを聞き更に良書の中冊を贈れり中に就てシナビ學士はシユワインフルドの災を救ひ得しプルタークの傳を贈りたればヲリンピアは是こそ誠に亡父が遺書也さて淚の中に之を抱て喜べりシナビ學士の女セツドラを招て再びハイデルベルグの家に養ふ家計廢く窮乏を告くると雖さもヲリンピアの經濟に長する出納宜を得て猶慈善の志を貫きければ疾病貧苦及シユワインフルドの亡命者の如きは皆なヲリンピアの恩澤を蒙らさるものなし加之他國の人にても苟も正義の爲に苦むものは必す之を助けたりヲリンピア常に曰く吾れは斯く貧苦困難の中に在るを喜ぶなりうは基督我と共なれはなり若し基督なきか天下の富貴も吾に於ては浮雲の如し。

ヲリンピアは書を同窓の友アンコステ今はゾイス公爵夫人に送りて其信仰を堅固にして敎法の爲に迫害を蒙るものを救ふべしさ又ロヴエル侯夫人へは懇し深く人世の辛苦を嘗むるものならでは決して基督に在て眞の生活を成すとを得す唯願ふ忍耐邁進以て自から屈するとなからんとを勸めたり是ぞヲリンピアが親友の爲に染たる最終の筆なりさすヲリンピアのハイデルベルグに於て交游するものは皆一時の名士たりグランスラー博士曰く予未た世間其心の信愛純正にして其行の高美神聖なる吾妻の如きものあるを聞かすとヲリンピアの名聲遠近に達しければ佛國の政治家ありて頻りに交游を求めんと欲す一日書を送りて昔し或る伊太利の女傑は詩家及慈善家の號を受けしとあれば宜しく其例に倣ふべしさぞ勸たり然れともヲリンピアは再び病危篤に迫り斯る良人の純愛も又良友の敬慕も今は一日を延す能はす五年の月日を送りたる連理比翼の樂も北部一片の土さ化し烏部の山の曉の煙に殘る跡もなく消失せけるこそ哀れなる彼のシユワインフルトの難より以後犯せし艱難は實に是れヲリンピアか病源にして自ら其起つべからさるを知れり去る程にグランスラー博士は其意を知り徐に慰めければヲリンピアは滿面に喜色を帶び莞爾として吾か永眠の地の光明四方を遍照するを見るなりと云しかは博士は胸を裂るゝ思をなし愛する妻よ憂る勿れ 光明中寂に汝か永生の家あるべし ヲリンピアは之を聞き點頭するもの歟吾今は何事も思ひ遺すとなし唯心身の安きを覺るのみ言未終らす雙眸朦朧たりヲリンピアは再び良人よ今微(かすか)に君の顏(おもて)を認るなり其他は唯々清香馥郁さして名花の香を圍むありと秋夜の蟲の聲よりも猶纖しくう聽こゆると云へは息は絶にける。

Digitized by Google

Original from COLUMBIA UNIVERSITY

グランスラー博士は流離困頓の間に最愛なる佳人を失しかは其悲哀堪ゆるに物なく茫然として獨り斯の世を嘆くのみ未だ一月を經ずして博士亦病に罹り溘然としてフリンピアに永生の域に伴へり皇エミリナも亦程なく逝て忽復た一家團欒の樂を彼岸に享けり斯てチリンピヤの訃音に接するやジエルマン、フランス及スウヰツルランドなるリフオームド教會は皆悼惜の情を表し又佛人ラスカリー博士は盛を厚ふしてフリンピア家族の葬儀を營へ且つ碑を建て今猶ハイデルベルクなるセントピイター會堂の側に在り。

○フリンピアモラタの碑に、

其道神を畏し其德人を動かすフリンピアモラタはモンチユアの碩學フルピアスモラタの女にして醫學博士マン、ドリユーグラスラーの妻なり天質秀異才學宏博殊も拉句希臘の文學に長す其人となり德美しく行清く且深く宗教を信す千載の下其人忍ぶへからず

女史一生の公論は既に其最も幸福なる最も神聖なる而て最も平安なる死に於て之を觀へし一千五百五十五年享年二十有九にして異郷に死し其良人及弟エミリヲと共に茲に葬る。

シユワインフルトの住民亦フリンピアの德を慕ひ爲に資金を募集し更に街衢に就て家を構へ碑を建て不朽に垂れんことを計り羅句の文を刻み、

此家最狹小なりと雖も哲人皆て此に居り其德行は寔に之をして高貴極大たらしむべし且つフリンピアモラタの一生は彼の一時期を制したる女子の學識は決して清潔の美德と一致すべからずとの妄を辨ずべし。

フリンピアの最優美なる性質を潤飾せし慈悲及清潔の二德は女子の古文學中より得し所もて一層の光輝を放つに至る而して女史の名其れ青史と永く傳播るへし。

或る教師日本の人口を計算して、

如此くでありますから、日本の一月には平均四八〇八と云ふ人類が住居して居るとさ知れます。

或る生徒問ふて曰く、

先生、シマスルト其の〇八と云ふ端數が老人ででもありますのでせうか、

教師ぬからず、

イエ、さうして、即はち之が子供であるのです。

小說

○あるのん物語（其四）

わめりえ　らいず著

美妙齋　たより　合譯

之を見るや否やあせなすは身も世もあられず、駈け寄ッて手でその刃を握りました。刃を、手で――で、私しは思はず叫び聲を立てました、指が切れるだらうと思ッて。

が、切れもしません、撓まぬ少女の熱心にはあざちるも感じ入り、刃を引きました。

「汝の眞實を愛でて赦してやらう。が、あせあす、汝は此男を夫に撰んだからにはまた一生の運命も最早さだまつたぞ。愛を共にし、また生涯を共にすると同時、神に逆らふ不敬をも共に犯すのだぞ」。

言ッたばかり、四下はたちまち闇くあッて、あざちるの姿は掻き消すやうに爲りました。

ところが、また此夜、私の父のあがが私に妻せやうと思ッたこすびが日中のため腦病に爲ッて死にました、で、私が父から受ける困難はまづ無くなりました。

それからは毎日父の家に居ましたが、寐床へ入るにも他のには入らず、出入の咎めを注意して恐れて居て、そして夜に

なると靴を脱いで黒衣を着け、里を出てけみュえるの花園まで忍んで行き、例のあせなすに逢ひました。

数月過ぎても猶處女は私の愛姉でした。で、いつでも花園で語らッて居て時には夜明までもさうして居ました。　あせなすが私の胸に頭を中て、聲細くさゝじめく時には私もおのづから頭を低れます。　私の命をつなぐ本は只この間の愛情ばかり。　比較すべきものも世に有りません。　言はゞ私があせなすに於けるのは胸が心に、また身躰が靈魂に於けるのと同じです。　そして私の行くのが遲くて處女が待ちくたびれた時、肱枕を待せてやれば嬉しさうに其處ですや〳〵寐る風情、丁度急流の胸に休む白蓮のやうです。

日が過去の方へと次第に逃げて行く內に（意味は「日が過ぎる」といふ事）私の心に段々湧いて來るのは洪水の期もやがて近くなッたとの悲しみです。が、あせなすを救ふ手段もありません。　恐るべき處からわが意中の人を救ふ、それが何で神へ不敬――たゞ思案に頭は燃えるがはり。　が、手段は得られません。

ある夜、私の肱をまた枕にして寐入ッて居る少女の躰をつくづくと眺て居る內に、考へれば私の愛情の無限またその力無、思はず苦勞が、丁度野火のやうに、熾に燃え立ッて來ました。が、また高笑ひするほど嬉しくなりました、さう考へ込で折角寐て居人を覺しては爲らぬと思ひ附いた時には！定め無い一喜一憂。私は無言でした。が、嬉しさもまた嬉しさ――血は泉のやうに走り流れるやうです。　次の日私が父の家で食膳に向ッて居ると、兄のしエむは言ひました、

「いよ〳〵豫言の中るのは今月だが、御前知ッて居るかえ。」

「はイ知ッて居ます。　いつ獸類を舟へ逐ひ込むのです。」

そこで兄は答へました、「是から七日の內に。」

「洪水ははじめ雷雨ででも來るのですか、それとも只の霖雨ででも。」

「それは知らない。」

で、私は斯う思ひました、雨が急に來ぬものなら、いづれ皆な乗り込む時、あせなすをも忍ばせて獅子や虎のやうな猛獸の居る處へ入れて置けば誰も疑ふものはあるまい。　恐怖は野獸をも眠けるもの。　恐ろしい話を聞いては小兒もやさしくなる、それと同じ理でよも處女も野獸には殺されまい。

かう考へて、その思案を語り、否か應かを問ふと、あせなすは答へて、「私の身躰も心もすべて貴下の物ですから御自

由になさッて下さい。」

て、私は引き寄せて接吻しました。

いよ〳〵洪水がはじまる日となりました。　　わせなすを救ふ日もさし迫りましたから、それと無く父に向ひ、私が飼ひ馴らしの鷲が有る、それを持ッて來るから一寸暇をくれろと言ッて乞ふと、父もうなづいて承知しました、「けれど早く……一時間の中に行ッて來い。　て、無いと、私は神の言ひ付けどほりわるくの窓を閉ぢてしまふから御前も活きられないよ。」

直に私は父の許をはなれて山の狼のやうに一散ばしり、行ッて見ればわせなすは花園で待ッて居ました。

が、無殘、泣き入ッて居ました、被衣は裂け、そして頻りに手で胸を搏ッて。

「なぜ泣くのだね、そして胸をうッて。」　直に傍へ寄ッて腕にかきいだくと、處女はすこし頭を下げて禮をして、そして啜り泣をして居ます。

が、その愁嘆の子細を竟に打ち明かしました、父と共に救われなくては強面いと言ッて。

しかし、これは無論出來ないとは私も知ッて居ます。

ところへ、闇のやうに黑くてそして帶まで垂れた鬚のある身の長の高い人が出て來ましたが、その眼は火になッた石炭のやうにかゞやいて、實に恐ろしい顏付きでした。

て、男はわせなすを突き退けて二人の間にわりこみ、そして高い聲で「何處からこんな情郎を連れて來た、淫奔娘め」。

○酒鬼（其三）　篠舩主人

鮓といふものの母に祟るが常か。陶侃の母も額に皺寄せて叱りつけ、孟仁の母も眉顰めてつきもどしたるが。作次に「サアお母さん……」と稲荷鮓を進められた時の老婆の苦しさ。仙家の桃ならば一顆でも……人界の粥では半日を凌ぎがたきに。今朝からは一滴の水も一吹の烟も樂まずに、此寒風――流るゝ水音の氷るまでの辛抱。武士……トりきんでも腹の蟲は鳴く。誘はれて眼に涙、呑込んでも出る唾に咽喉を霑ほし、震へる齒をかみしめて一ト言「たわい……たわい……」と聞かぬ悔しさ。是れでも……我子、風引かせまじと……死ねかしト思ふても。戸棚を開けて一枚の布團――大石で壓付られた海綿の樣な布團を掛けながらジット我子の顏。七ッ八ッの時には「お可愛い坊樣」と會ふ人毎に賛められしに。手習讀書……それほど馬鹿ではなかりしに、考へれば……死な

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

れた夫が恨めしひ。晩酌に少しツヽ面白半分に呑ませたが今は仇。櫻色に染めた笑ひがほ、嬉しさふに踊つた手つきが目にちらつく。其時は可愛さが身にしみ渡つたが、是が酒亂の徴候かと思ふと張裂くばかり——此胸が。持佛堂の方を向きて力なさゝふに伏拜み「禮譽得道居士……祥月命日南無阿彌陀佛……」。ワッと泣頽れる。油盡きしか手らんぷの光の滲さ。サット來る風に椎木のうなるも物凄く。何處となく折々に聞ゆる新内の流彈、浮れ女が耳にい……。是も老婆の心には哀を添ゆる斷腸の音色。昔思へば淺ましひ今の零落、何の因果か——七十に近い此歳で。

「お須磨ハモウ歸りさふなもの。」獨り言、是も口の内。位牌を見詰て……涙。禮譽得道居士 南無阿彌陀佛。思ふまいと思ふても目の前にちらつく昔の姿。凹き目を見張りて、作次……と曰ひしを遺念に御臨終。其間際までも御心配ありし作次の不行跡。此母が傍に居ながら言甲斐なしとさぞや思し給はんが、帝釋天も照覽あれ……母が赤心を。甘やかしたが罪と毀らば毀れ、我子の惡き親はあるまじ。アレ見ろあの態を……ト我子に後指さすと聞く時は八裂にせらるゝ心持。苦勞を慰めらるゝも有難からで、退徳顔に親不孝と罵る人の怨めしさ。御存じなきか——常に佛の樣な氣質、正直すぎて案じらるゝほど。酒といふ魔物が此世になくば……。酒に見込まれたが悴の不運。誰あらふ二千五百石の家柄で裏家住居、愚痴な樣だが下主下郎と朝夕の挨拶。御先祖樣を汚す悴の不埒。是も酒故、惡い酒 百毒の長。

持佛堂の前に泣倒れ。位牌に向ひ——吸上げ、我子をながめ——しやくり上げ。しばしい涙——家も浮く計り。是を手向けられてい十万億度の遠國でも知らぬ顔も出來まじ。其徴候にや、梁を走る鼠の音と共に動く位牌。

夜は更けたり。今打ちし地主樣のボン／＼、十一時か……それとも十二時。常にましたる寂しさ、哀れは一トしほ——月に鳴く鴉「お須磨はモウ歸りさふなもの」。老婆は物思ひ、じめつく眼を拭きながら思案。遠くから響く下駄の音、アレがお須磨の……ト思ふ内にいつか消へる。

コン／＼と咳に咽ぶ……涙。右の拳で胸叩きながら「お須磨い……」、ト言で苦辛苦勞が思遣られる。信切の樣でも根が他人、もしや我子に愛想がつきて……、否ゑお須磨よ限つては……ト我と疑を消しても消へ兼る姑根性。嫁姑の仲ほど難かしきものは世にあらじ。硝子障子を隔てゝ談話するやうなも

の、姿は見へても言葉は分らず、眼の働き口の動き方で判斷する間柄、觀相の術を知らずば姑の機嫌取れぬ事と知れ。お須摩は十七の時嫁入して今年三十六、二十年の酸苦を共に甞めてもまだ「お須摩は……」ト折々に出る姑の愚痴。實の子に持餘して賴みにすれば又心配。まさかに……ト思つても歸の遲さ。九時過に出て、モウ十一時……十二時かも知れぬのに、あんぼでもコンナに手間も取れまいが……。聞慣れた下駄の音、路次の溝板の上。思はず立て「お須摩かエ……」「ハイ……」勇ましい返答。弱き足を踏しめて障子開けに出る、ガタック雨戸を無理遣にお須摩は中に、

「唯今、おそく成りました」

「どうしたノ、お前……モウ十二時だよ」

「エ、廻道をしましたから、お母さん……是を」

障子開けたる母に前垂の包を渡し。盗まれる物なきも用心は嚴重にと覺束ない心張をして上り。眞ン中に寐たる作次が大の字姿を見て苦笑ひ「オヤマア……」。母の傍に坐を占めて寒へた兩手を頬に當てホット息「寒かつた事」。母は前垂の包を見て不思議さふ「お米かエ……」。

「エ、お米……」　答は何となく嬉しさふ。

「どうして……」　嫁の顔を見詰る。

「マアお母さん聞て下さい、あの子もホントに」　早やうるみ聲。「お母さん、お屋敷へ行てアノ子に會つたら何とも曰はない内に……六……六十錢呉れ……ましたよ」

「アノお……お時が……」　母もうるみ聲。

「あの子が――佛樣の日だからお菓子を供へた――ッて」

「お菓子を……どうも……マア感心な……」

「それで此お金はお花の代にッて」　瞬きをしながらの物語。「感心な……」老婆が一ト言、せき止あへぬ淚、顔背ければ作次が寢顏。孫のしほらしい心を聞けば惡くなる忰。子が可愛くはないか――不便ではないか、子に苦勞をさせて親の役目が濟むものか。何事ぞ。天にも地にも唯た一人の父の命日に氣樂さふな酒三昧。母や妻の嘆を思はざるや、勿躰ない――亡父の位牌に足向けて。佛樣の御罰でも碌な事はあるまいに。「作次……オイ」淚と共に老婆、答は鼾息計り。「もし……あなた」　搖ぶる妻に一ト言「エ、うるさい……」

母は嫁を――嫁は母を、互にヂット、見詰る眼からハラ〳〵。堪り兼て袖を顔に――忍び泣。

「お母さん、月給は……」

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

「まだ知れないが、ドウモ遣つた様だよ」

「また……………」

期した事だが今更の様に呆れる。見れば竹皮の上に稻荷鮨、禁斷の魚ならねど、ドウして咽喉に通らふぞ。死ぬほどな——死ぬより辛い苦を妻子にさせて、半月の給料を酒に費あすとは。

母も嫁も無言。千萬無量の心配は込上て——今は一言も出ぬ。丑滿時にあらねど四邊は寂莫、風もいつかなぎて疊を飛ぶ蚤の音が聞へる。折々に棚を騒がす鼠、氣味の惡い竹次が鼾息。憐れに燃ゆる手ランプの光、是も微か。

鷄の聲、まだ夜も明けぬに。何處となく人聲——足音。ハテもう明けたか知ら……、裏窓を開けると——火の子はパラパラ。こはそもろ、氣は顚倒。急かにガヤガヤ「火事……火事だ」。胸板を突破る半鐘の音「ジャン〳〵〳〵………」

寄書

○皇后宮御降誕日を祝ひ奉る　　明治女學校　四條兼子

五月のはつかあまり八日さいふ日ハ天下明らけくしろしめす天皇のきさいの宮のあれました日にこそありけり。この日ハいかなるよき日いかなるめて度日にかあるらんいともかしこくいさも仰き國の母と仰き奉る宮のあれまして中つ世衰へたる御門の大みいつを古への御てぶりに返し給ひける大御代のおほみ政事を助け給ひし御いさをハ天雲のむかふすかきり谷くかさわたるきはみたふさみ奉らざるものはあるその御みまつり事を助け給ふかたへに女の教へに御心をさへよせ給ひてあつく廣くいうしみ給ひけるこさのかしこさいはん方なかりきされぱけふといふけふハきさいの宮の御かけをいはいまつりて桃花の三千させは物かは幾萬世までもかしこき御いさをあつき御惠をたゝへ奉らざらめや。

たみ草におきあまるまてかゝりけり
かしこき君かふかきめくみハ

○皇后宮御誕辰を祝し奉る　大坂一致女學校　大石りん子

玉たれの奥ゆかしくも橘の匂ひそめたるけふりめてたさ

同　鈴木はつ子

みかゝみの曇りなき世さ皆人はけふのたる日を祝ひ奉らん

同　若菜なつ子

杜若世にうつくしく咲そめてけふは御池の波も匂ひぬ

同　菊池はる子

あら金の土の光りも千代八千代いやまさりゆく影をそへけり

同　坂本まつ子

うるはしくやまとなてしこ咲うめて雲井の庭に匂ふたふとさ

同　酒井しげ子

吹わたる風ものどけし大宮の若葉にこもるいくちよの影

同　吉川あい子

敷島のやまさこゝろにみひかりをそへよとけさは匂ふ撫子

同　寐多とく子

玉しきのみ庭のみはし千代かけてかはらぬ影をてるかめでたさ

同　安田うの子

かしこくも世に出ましゝけふの日をときはかきはに祝ひまつらん

同　松井せつ子

天地の光りもともにみもすその川せに清くてり渡るらん

同　大塚あい子

ふーて見れハ地に生ふ草も御惠の光りをうふるけふのめてたさ

同　杉江たか子

みうのふも夏はみさりの色にかく榮行かげをけふや見すらん

同　田中のぶ子

咲うめて幾よ久しくかきつばたみ川の水に匂ひこめけん

同　佐藤ふさ子

あら金の土の光りをけふは又ふーてまつらんひな𛀁鄙ぉ

同　同　竹本きく子

さふさくもみそのゝうちに生ひうめし松にさかゆく色を見るかな

同　同　近藤しな子

貴ちよも匂ふ御苑の撫子花上なき色に咲出にけり

同　同　鈴木はつ子

天地もともに榮ゆく大御代のつきせぬかげを見るがめでたき

同　橫濱山手共立女學校　研習會員

ゆたかなる君か惠みのかきりなくつゝむに餘るけふのかしこさ

久方の雲井の宮も賤か屋もひとしく祝ふ君が千代哉

打つさひいはひまつらむ千代かけてさかゆく君かゝきりなき世を

かげふかく松の常磐のいろ見えて君が千歳を祝ふけふかな

天地をめぐる月日のかきりなきかげにも君が千代は見えけり

時事（本號余白に乏しく不得止六號字に改む讀者諒焉）

○皇后陛下御誕辰

來る廿八日は陛下の御誕辰に當る、全國民は宜しく之を天長節に對して謹しみて奉祝すべし、中にも御婦人方は特に之をことほぎ、陛下が慈しみ深く渡らせ玉ふ種々の御善業を賛へ、又た其の日本一千九百萬の女性を導かせ玉ふ彌や高き御感化を謝して、切に陛下の万々歲を祈り奉るべし。

○聖經を奉呈せんとす

右御誕辰祝日に際し、京濱婦人祈禱會は基督教聖書を納呈し奉らんとは爲す、吾人は　陛下が之を受納あらせられて、美例を全國の女性に示し玉わらんとを熱望し奉まつる。

○特立獨行、自然洒々

此の腰五斗米の爲に折らず、安んぞ此の頭まを曲げんや、吾人はビスマーク君と共に上帝の外に懼るゝものを有せず、彼の官海に於ては上官と云ひ、政黨に於ては總理と云ひ、事業界に於ては社長と云ひ、交際仲間に於ては女王と云ふものの如き、何んぞ其のエラソウな顔をするとの甚しきや、而して之に媚びて唯々たるものも笑ふに堪へ、之に怒りて無暗に罵詈するものも賞むるに足らず。蓋し人世には金箔が行われ易きものなり、然れども金箔の効能は崇拜するものあるにより て行わる、苟くも若し個々に特立獨行の氣節あり、長幼上下に恐さく洒々落々の自然あらば、俗世と云へども夫れ果た何如に樂しくあらん。吾人多人數の集會に入り、特に貴族的の集會に參るときは尤も此の感多し、獨り樹下に逍遙して獨樂す、話したければ話し、笑ひたければ笑ひ、お辭儀したければお辭儀し、默想したければ默想す、甚はだ氣樂なり。

○人身攻擊

名譽は是れ凡人の無形財産なり、故に之を保護するの途に於ては特に謹密ならざる可らず。中に就いて女性に關するの一褒一貶は其の終生の幸不幸に係はると實に非常なるが故に、之を批評するものは更に深く謹密ならんとを要す。彼の男子社界に於て一笑に附する如きとも女性の仲間に於ては倒天の出來事となるとあり、通俗之を人の子を「キヅ」にすると云ふもの即はち是れ也、願くは世上の批評家、所ろ風評家、は常に戰々兢々として其事に從ふべし。

○何等の怪報ぞ

大同新報第五號は其時事欄內に「濁世」と云へる一項を掲げ、實に左の如く云へり、

今代の諷刺小說を以て鳴る者概ね改進新聞を推して稱首となすといふ、而して其の四月以來に續載しつゝある者を「濁世」となす、誰し何れかはしらねど高等の教育を授くる一女學校の內幕を描寫せし者なりとか、其小說中の人物を觀るに、其校長なる理學の博士あり、講師なる法學の博士あり、二博士の話中に寫されたる他の貴女學校の女教授あり、二博士の眷戀せる一女學生あり、私立女學の女教師あり、其養女なる醫學修業の生徒あり、耶穌教師あり、大學生あり、而して總へて之を言へば皆敗德醜行、私奔中絕の穢らはしき人々なり、而して表面には善行の容子を作る人々なり、吾儕は始んど終讀するを欲せざる者ありき、偶々「日本」新聞を一讀するに、又左の怪報に接しぬ、

○女生徒の品行　貴女の製造を以て自ら任ずる或る府下の學校は頗る西洋主義を以て教育せられ音樂舞踏の儀しも時として開くとあり其學校の女生徒は固より婀雅優美を以て文明の貴女たるに背かざるの風儀あるべしと思ひの外其平素の言行實に意外なる者にて所謂書生風染み僕は二匹立の馬車に乘るの人に非ざれば決して婚せず君は常に秘書官の細君たらんとを希望せり僕は異日女學校を興して其校長となり一生人の妻とならじ妻は卑賤奴隸たるのみ米佛の女流は今や戀慕の自由を唱導し夫婦なるものを廢せんとの議論盛なりと聞く何を苦しみて窮屈なる夫婦の約を結ばんや男女固と同權なり戀慕は我自由なり昨日甲を戀

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

暮し今日乙に會想するも誰か此自由を妨けんなど放言到らざるなく其寄宿寮の部屋などにて互に胸襟を開きての物語りを聞きなば實に教育家をして女子の教育ほどむづかしきものはあるまじと歎息せしむるよし成る程佛米婦人の外觀は其智識といひ其言語といひ交際の伎倆といひ美術の藝能といひ恰もパラス、アナ子の如く美なれ共又其內轄に立入りて見れば實に案外なる者にて殆ど想像の自由を實行しつゝあるかと思はるといひ女子教育の衝に當るの人は深く注意せされは醜聞を新聞紙上に流すの恐れなしとせず否已に醜聞を流しつゝあるは聞苦しき事にこそ

さ、何ぞ其言の改進新聞の小說に寫す所と相似たるの甚しきや、吾儕は猶ほ記す、高等女學校長、理學博士、矢田部良吉君が、女子の教育に基督教の効用を說きたりさて、基督教家なる女學記者が嘗て之を其雜誌に掲載せしとありしを、官立の女學校は高等女學校より立派なるはなし、他の女學校についての不評判は間接に之が模範たる高等女學校の冊辱なるべし、矢田部博士の御意見は彼の如く、改進新聞「日本」の傳ふる基督教國の婦人、及び之を慕ふの實在並びに假說の日本婦人は彼の如し、吾儕惑へり、是に於て漢學先生、儼然として容を改めて、の玉はく、俾日男女七歲不同席と殆んと之か爲め也

吾人が探知する所ろによれば府下に決して如此きとあらず、若し其教育方の謹嚴ならざる事、其校風の浮立てる事、其學問交際の虛飾に多き事、を舉て吾人に問ふものあらば、吾人は全然之に大不滿なりと斷言するとを猶豫せざるべし。然れども只た夫れ意見の異なれる、主義の同じからざる、何んさなくシヤりにるとある等と云へるに因りて、邪推製造をたくましうするものあらば、吾人は先づ鞭を擧て如此きものより責罰せざる可らず。

〇根底よりせよ

假りに賄賂を取りたりとの風評ありとせよ、而して世上に堂々として之を責むるものありとせよ、此時に當りて若し賄賂を取れりと云へると暴露したりとも其人は決して道德上の後悔を爲さゞるべし、寧ろ彼は云はん「失策せり」と故に彼は之に由りて賄賂渠の今後更に巧妙ならざる可らざるを經驗したり、安んか衷心罪を悔ひて天に謝するの道念あらんや。何んとなれば今の不德を責むるものは其私しゝ於て未だ必らずしも純潔なるの人に非ず、若し細かに洗ひ來れば何んぞ斗らん彼亦異日同穴の狐狸たりしとあらんとは、左れば責めらるゝものも服せず責むるものも只ゝ怒るとなし、只だ交際上の反對、政黨的の反對、利益上の反對によりて他を攻擊するゝ淺深ある也。嗚呼如此くんば何の日にか眞正の道德論行はるゝを得んや、大義親を忘るゝとは吾人幼けなきときより明師したり、而して今人の之を行ふに難んずる何んぞ夫れ如此くなる。

〇女子は長壽なり

概するに女子は男子よりも長壽なるが如し、去年十二月卅一日の調査によれば、全國中百才以上の女子は七十七人なるに男子は僅かに二十人なり、尙ほ百六才以上の女子は三人ありしに其以上の男子は一人もあらざりしと云へり。此項ろ亦た長崎縣下に於て九十才以上に達したるものゝ來歷を取調べたるに、其尤も高年なるは悉く女子にてありき。然らば何故に斯く女子は男子よりも長壽なりやと云ふに、吳文聰氏は東洋學藝雜誌に於て他の四理由あるが爲めなりと答へたり

一　男子よりも女子の身躰構成宜しき事

二　職業に從事するに當りて其勞働男子に在りては女子よりも甚はだしき事

三　女子の方品行の宜しき事

四　交遊之なきが故に危害に逢ふも亦た之なき事

内報

〇女生徒募集　文部省所轄の美術學校に於て女子の生徒を養成せんとの議ある趣は曾て聞く所なりしが愈決議せしと見え來る九月新學の期には女子若干名を募集するとのことなり。

〇第一醫院婦人室　同院にては近來婦人患者の入院多くして何分現在の建物にては狹隘なる由にて今度同室を新築する事となりしが其費用は千二百圓の豫算の由

〇東京府養育院寄附金品數　東京府養育院へ去月中寄附せし金圓は合計五十六圓九十五錢物品十四種此見積金額三十二圓八十九錢五厘にして寄附人員は五十人なりしと云ふ。

〇產婆鍼術等人員　福井縣下に於ける昨廿一年十二月三十一日現在產婆の數は三百六人にして女鍼術二十一人女灸點八十二人女按摩百六十四人なりと云ふ。

〇保姆募集の照會　今度京都府師範學校にて管內幼稚園ゝ從事せしむべき目的を以て保姆五名を募集し去る十五日より來る十二月十五日迄保育法を傳習せしむる趣を以て同校より元上中京區役所宛にて區內志願者募集の儀を照會したる由。

〇愛知女校附屬幼稚園　は本年の新設にして保姆二人あり幼兒四十一人を保育せりと云ふ。

外報

〇印度婦人　カルカッタに在るカュプベル醫學校に女子級を置きたるに付此度十五名の女生入校の內十人はスカラルレップを受け殘五名は月謝を免さる、何れもブラモン宗。

〇ロシアの禁酒會　伯トルストイの爲に出來たる羅士亞禁酒會は一昨年十二月一日に出來たるものなるが現今は會員三百五十人あり。

〇ラマバイ　同女史は歸國後人民の歡待淺からざるが直ちに同校設立の運びに至りボムベー府內バックベーの邊にて之を開きたり。

●滯金催促

大和國五條新町聖三一公會　荒木政利

秋田縣雄勝郡岩崎町　石川伊豫

京都府今出川寺町西へ入二丁目五番地　澤集光堂

右は本誌代金滯り居候に付數回御催促申上候得共今日に至る迄御送金無之如何にも不信切無頓着の至りに存し候に付き更らに本誌廣告欄内に於て及御督促候也

明治二十二年五月　女學雜誌社會計掛

普通衛生雜誌

第四號　明治廿二年五月十一日發行　掲載目次

賣淫ノ制　醫學士古川榮君述　婦人衛生　醫學士櫻井郁二郎君述　●茶ヲ飲ム害○蠅ハ病ヲ擔フ○禿頭ノ豫防○麵包粉ノ害○虎列刺ト飲料水○壁紙ノ毒○女子ノ數多キ府縣　醫學士古川榮君述　小兒鼻腔の注意　醫學士坪井次郎君述　乳兒養育法　在獨逸ユルランゲン府加藤時次郎君述　禮儀と衛生　千之生述　飲食物ノ溫度●通俗衛生上日本人ノ誤迷　東京岩崎三平君述●神奈川縣下の惡性病○大日本私立衛生會○吐瀉病流行○天然痘○出版書目○東京府の人口統計○實布的里亞の死亡數○衛生新誌○ブライト氏の衛生上の意見○寄贈雜誌

定價　一冊六錢郵稅壹錢半ヶ年前金郵稅共四十錢一ヶ年前金八十錢郵券代用一割增且一錢切手ノ事

發行所　神田東紺屋町四十八番地　普通衛生雜誌社

依田學海先生序❀森田思軒先生序

宮崎三昧先生著

日本華文

全一册總クロース頗美製本定價金七十錢郵稅共

我邦の文章世界は目下戰國の域に在り雅文漢文の偏安するあり通俗体の横行するあり言文一致の新旗幟翻れば雅俗折衷体の猪鎗出で歐文直譯体の猪進豨突漢文書下体の直進徑行各雄を稱して互に鹿を爭はんと欲す此の時に當り先賢故哲手澤の跡を究て其の苦心の所在を察し其の妙用の所存を繹ねんは獨り一人各個の文章に洪益あるのみならず實に我邦文學のため必要缺く可らざるの事業たり本篇は則此の必要に遇られて出たり支那には譜文の法あり西洋には華文の學あり獨り日本の文章には僅に詞の法のみありて妙用を指示すべき法なし法なきに非ず法は無法の中にあれど明に名目を附して文の眉目を鮮明にすべきものなきなり是豈文の缺點に非ずや本篇則此の缺點を補ふ爲に出たり此の書採る所は太平記藩翰譜の雄渾より曾我物語花月草紙の流麗に及び弓張月雨月物語等の莊重より淨瑠璃謠曲の奇絶に及び將又膝栗毛八笑人の詼謔網羅して餘すなし我邦華文の諸体を兼備したる者と謂ふべし

本書は漫然文章を集めたる文抄文選と異なり本書の主眼は情剃の批評により日本華文の蘊奥を發揮せんとするに在り著者の評能く原作家の意を得たるや否は知るべからずと雖原作家の自ら知らざる造詣を指摘したる事も亦少なからざるべし毎題下作者の小傳及其の本領並に書の性質等に關し簡明なる評註を下したり本書の批評は著者か娛樂の餘に成れり意に任せて讀み興に乘して評し歲を積て始て此の書を成せり故に其の旨や深く其の意や高し徒に爛熟の套語を羅列して古人の文を死了せしむる俗評と其の選を異にせり明窓淨几閑讀一過神和し氣暢ぶる者必ず此の書に在らん此の書は本年一月の發行の豫定なりしも印刷製本等念に念を入れたるを以て思の外隙取り漸く今日發售の運びに至れり大方の諸君速かに一本を購讀して世人の從來未嘗めざりし華文の味を賞せられんことを乞ふ

日本華文發兌所●大坂東區備後町四丁目梅原龜七●京都寺町二條下ル梅原龜七支店東京南傳馬町一丁目六合館●同神田小川町集成社●同日本橋通一丁目大倉書店●同通二丁目小林新兵衛●同通三丁目丸善書店●同通四丁目春陽堂●同京橋區南紺屋町同神戸書店●同三十間堀二丁目博文堂●同芝三島町弦巻書店●同日本橋區若松町榊原友吉●同大傳馬町二丁目佐藤乙三郎●同麴町區麴町三丁目石塚德次郎

遞信省認可

同志社大學義捐金第一回報告

自明治廿一年十一月至明治廿二年四月

毎日新聞社	一二四圓	六八〇
報知新聞社	二八	二五〇
朝野新聞社	二九	六〇〇
東京公論社		一〇〇
改進新聞社	四	三〇〇
經濟雜誌社	二八	五〇〇
民友社	二七〇八	八五六
警醒社	五八一	四二二
女學雜誌社	五〇	〇〇〇
大坂毎日新聞社	五〇	八〇〇
大坂朝日新聞社	五六三	三二五
神戸又新日報社	六一二	九八〇
京都日出新聞社 中外電報社	三九一	七〇〇
同志社	五五一〇	九五七
合計	一〇六五五	四七〇

拜告一たび大學設立の趣旨を廣く天下に訴へしより以來世の同感の人士は各々奮て應分の御義捐被成下第一回の募集に於て既に右の結果を見るに至りしは野生が深く義捐諸君に向て感謝に堪へさる所に御座候茲に事務多端の傍ら義捐金募集方御取扱被下候各新聞社の高援を謝し併せて義捐諸君の芳志に向て謝意を表すると如此に御座候頓首

明治廿二年五月　同志社大學發起人　新島襄

◦(倫)(理)(の)(基)◦

紙數小形卅四頁
定價金貳錢
郵税金貳錢

右は、一小册子なりと雖も、一夫數婦の人情に悖り自然に背く所以を痛論し一夫一婦の正理が社會全躰に行はれざれば、今日我邦に最も欠乏せる一家の幸福は得て望む可らざる所以等を切論したる者なり、

發賣　京橋區日吉町　女學雜誌社　京橋區日吉町　民友社　京橋區加賀町　警醒社

發兌

五月。四日　十一日　十八日　廿五日
六月。一日　八日　十五日　廿二日　廿九日
七月。六日　十三日　二十日　廿七日
八月。三日　十日　十七日　廿四日　卅一日

定價

一册。六錢　郵税。一錢（但府内無郵税）
十册。五十八錢郵税。十錢（同前）
半年分　一圓四十三錢　府外は　一圓六十九錢
一年分　二圓六十錢　府外は　三圓十二錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行　一回　（廿七字詰）　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道徳なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町鍛々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町頁明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田屋貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年五月廿三日印刷
明治二十二年五月廿五日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行者　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷者　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.69 six months, *yen* 3.12 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.